
弱さの果て

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱さの果て

【Nコード】

N1612T

【作者名】

リン

【あらすじ】

現実から、現実ではない世界へ。たとえば、幻想の世界であろうと、そこに存在する者にとってはそれが真実であり、それが現実。物語に入った四人の高校生は、自分の物語を創ってゆく。自分を、物語を、創る様々な愛のかたち。それに気付くきっかけを与えられた四人は、何を手にするのか。

R15としておりますが、構えずにお楽しみ頂ければと思います。52話完結です。

【H】終わりの始まり（前書き）

今作は、一人称視点に致しました。主人公は四人おり、視点が話ごとに変わります。ほぼ時系列に沿っての展開となりますが、サブタイトルを参照して頂くことで、特定の主人公のみの視点を追って頂くことも可能です。しかしながら、私の力量不足もあり、一人を追うだけでは物語の全容は見えません。物語としてお楽しみ頂く際は全話をお読み頂き、特定の主人公に感情移入して頂く際は【その主人公のイニシャル】の話をお読み頂ければ幸いです。

【H】終わりの始まり

放課後の図書室に脚を踏み入れる。私立高校だからなのか、規模はかなりのもの。他所で見たこともないような怪しげな本も多くあった。

室内を見渡すと、一角から三つの視線が私に向く。予定通りの面々。やはり、私の見込みに間違いはない。

「呼び出した本人が最後に来るってどうよ？ ハルちゃん」

祐介が言う。言葉とは裏腹に、不満は感じられない。

「ごめんね。みんな、来てくれてありがとう」

形だけの言葉。そこに申し訳なさそうな表情とほっとしているような感情を乗せて、口にする。

「で、どういう集まり？ みんな知ってるヒトだけど、共通点があるかないよ？」

綾香は本当に不思議そうに聞いてくる。それをこれから話すというのに。黙って私の話を待つ修一を少し見習うと良い。

「ちゃんと共通点はあるの。でも、それを話す前に、少し雑談しない？」

「いいね。せっかく集まったんだもんね」

祐介は予想通りの反応で、私の意図通りに場を動かしている。修一は私の意図を測っているように見える。

「つまんなかったら、アタシ抜けるからね」

綾香は不満を全身で表現している。せっかく可愛いのに、もったいない。整った容姿は大きな武器になるというのをわかっていない。「ねえ、人生がつまらなくない？」

私は問題を提起する。最終確認のために。

「んー確かに退屈だけど、楽しんだモン勝ちじゃないの？」

「祐介君は天才だからでしょ。アタシみたいな凡人には運命っていう大きな壁があるの」

「運命つて。そんなのないっしょ？」

「アタシは信じてるの。結果はいつも決まってるのよ」

「俺が変えてやるっか？ 今日から俺と付き合う運命なんじゃないの」

祐介と綾香は問題ない。修一は最初からずっと黙ったまま、私から視線をはずしていない。自分から動く気配はないか。

「修一君はどう？」

祐介と綾香の視線もそちらへ向く。

「シユウからも言っつてやれよ。俺はアヤちゃんの運命のヒトだつて」

「シユウ君はアタシの味方だからそんなこと言いません」

「春奈さん。目的を話してくれないかな」

「修一君、あまり疑わないで。ちよつと確かめたかっただけなの」

「俺はみんなの共通点が何となくわかる」

「気付いていたんだ。それでも来たということは、確認の必要はない。」

「何だよ、シユウ。この四人だけの共通点なんてあるか？」

「そうだ。ハル、それ話してよ」

「ふふ……。今から楽しみ。みんな、死なないでね」

「おいおい、ハルちゃん。物騒だな」

「祐介。俺達の共通点は孤独だつてことだ」

「アタシ、そんなことないよ？ そうだとしても、そんなのアタシ達だけじゃないし」

「同感。シユウ、そりゃハズレだわ」

「多分、気付いてないだけだ。春奈さんの目的がわからない」

「それじゃ、また会おうね」

私の挨拶は聞こえただろうか。三人全員と再会できるといいけど。

【Y】結果を受け入れれば原因はいらぬ

くそっ……どうなってんだ。どこだよ、ここ。

「おお、救世主様！ 早速お名前を！」

俺を見て言ってるな。よく見れば囲まれてる。一体何人いるんだ。

「俺のことかな？」

一応確認してみる。

「左様でございます。お名前は覚えていらつしやいますか？」

どうも間違いないみたいだな。

訳のわからないところへ放り出されるのは、初めてじゃない。中学の頃までは、親に連れられて、芸能関係の事務所やテレビ番組の変な企画にいくつも行った。転校も何度も経験した。

どうせ何とかなるんだ。楽しければ、それでいい。

「俺は、祐介。救世主って何するんだ？」

話は大体わかった。こいつは面白そうだ。城の個室付きなんて贅沢な話だ。

「で、俺が大将になるの？」

「立場としては、遊撃部隊長ということになります」

よくわからないな。部隊ってことは実戦側なのは間違いないか。

「それは偉いの？」

「指揮系統においては何の権限もありません。完全な独立部隊です」
「誰にも命令されない立場で、この国のために戦う部隊ってことでいいかな？」

「はい。部下も祐介様ご自身で選別して頂くかたちになります」

「面倒だからパス。入りたいヒトいたら入れといて」

「はっ？ しかし、それでは」

「要はこの国を救えばいいんだろ？ 救世主ってそういうもんじゃ
ないの？」

「……仰せの通りに」

とりあえず、色々見てみたいな。

【S】実力と肩書き

厄介なことになった。こんなことになるなら、春奈さんの誘いになんか応じるんじゃないかった。

「あの……。救世主様、ですよね？」

少なくとも、俺の住んでいるところにはこんな派手なドレスで外出する女性はいない。間違いなく、ここは俺の知らない場所だ。

「あの……。大丈夫ですか？」

「俺の言葉がわかりますか？」

「良かった！ 大丈夫でしたか？」

とりあえず話ができるなら何とかできる。できるだけ情報を集めなければ。

なるほど。俺の全く知らない場所ではなかったのか。

城つてのは思っていたより広い。

「お話はわかりました。が、俺は救世主にはなれません」

「そんなはずは！ 修一様が現れた時期も場所も、伝承の通りなのです！」

ロールプレイングゲームは経験があるが、これはゲームじゃない。俺には、世界の人々に都合の良い勇者のような、持って生まれた才能なんてない。

「様、はやめて下さいと言ったはずですよ。俺は特別な人間じゃありませんから」

「お願いします！ 私達を救って下さい！ お願いします……」

多分、必要なのは俺じゃない。が、どっちにしても確認は必要だな。

「この国を救ったら、俺は元の世界に戻れるんですか？」

「それは……わかりません。伝承では、過去の救世主様は皆、消息を絶つたとあります」

それなら、望みはかなりある。情報がない以上、それにすぎるしかないか。あとは……

「一番腕の立つ方と手合わせさせてもらえませんか？」

「貴方に敵う者などおりません」

「お願いします」

勝負は数秒で決した。手から弾かれた剣が宙を舞っている。

視線を走らせてみたが、周囲の視線は全て俺に向いている。事態を予測していたのは俺だけだろう。

宙を舞う剣の行方を見守る。誰もが言葉を失った静寂の中に、金属音が響き渡った。

「これでも！俺が救世主だと思いませんか！」

俺は剣を拾いながら言った。

「俺には、期待されているような力はありません」

「確かに剣術の心得はないようです。姫、いかがなされますか？」

手合わせした相手がドレスの女性に問う。この答えで俺の行動は決まる。

「それでも……貴方は私達の希望です。それは変わりません」

「俺は、剣術の心得だけじゃなく、戦闘の経験すら無いんですよ？」

「私は貴方を信じます。力をお貸し下さい」

俺自身を見てもそう言うってくれるのか。必要としてくれるなら、応えたい。

「わかりました。では、お願いがあります」

「できることであれば尽力致します」

「これより俺は一兵士です。特別な存在ではありません。立場に合った扱いをお願いします」

【A】素直な憧れ

この状況にも少し慣れてきたけど、ちゃんと帰れるのかな。

「お口に合いませんか？」

そういう顔をしていたのかも知れない。慌てて笑顔を作る。

「んーん。おいしいよ。ありがとね」

アタシも料理くらい練習したい方がいいのかなあ。シユウ君は料理できるコが好きって言ってたっけ。自分で上手に作るのに。祐介君は、可愛ければ料理なんかできなくてもいいとか言ってたよな。

「あ！ 何、今の？」

思わず声が出た。薪に突然火が点いたように見えただけ。

「火を点けただけですよ？ 何かおかしいですか？」

「どうやって？」

「どうって、こうやって」

また！ 何で突然火が点くのよ。

「もしかして、魔法ってやつ？」

「魔法？ 我々は念術と呼びますが、魔法というものと似ていますか？」

「すごい！ まさか、こんなのを目の前で見られるとは思わなかった。」

「アタシの知ってる魔法とそっくりだよ。それって、アタシもできるかな？」

「ええ。基本的なことさえ理解できれば、誰でもできますよ」

「やったやった！ 魔法使いになれるなんて！」

「じゃ、とりあえず、その火を点けるのを教えて」

「わかりました。まず、火を点けたいところに触れます」

「これでいいかな？」

言いながら、学生証からメモを一枚破り取った。

「はい。では、触れている部分に自分の体温を集めるようなイメージをしてみてください」

「何それ。難しいな……こんな感じかなあっつ！」

「大丈夫ですか！ まさかここまで強力な念をお持ちとは……考え至らぬ失態をお赦し下さい」

指先からは煙が立ち上っている。持っていたメモ用紙は、跡形もない。

「すごいね、これ。色々練習したいな。このくらいの火傷は気にしないで」

「お見せ頂けますか」

「あ！ ちよつと！」

男のヒトに手を握られるのって、シユウ君以外にはなかったから緊張する。あれ？

「何か痛みがなくなっただけど、これも念術？」

「その通りです。綾香様がお望みであれば、順に手解き致しますよ」

「色々聞きたいんだけど、とりあえず、どういう原理？ アタシのいた世界では、そんなこと誰もできないんだよね」

「それなのに生活ができていますか？ 興味深いお話ですね」

「それはまた話してあげるね。今は念術のこと教えて」

「失礼致しました。念術とは、自身の念を対象に与えることで発生致します」

「ってことは、熱くなれって思ったら火が点いて、治れって思ったら怪我が癒えるの？」

「大まかな理屈はそうですね」

「そんなの、誰でも何でもできるんじゃないの？ 何か怖いな。」

「ただし、何でもできる訳ではありませんし、リスクもあります」

「アタシの心が読めたりしないよね？ 適当に使うのはやめておこう。ちゃんと知っておかないとやっぱり怖い。」

【H】見ているのは目的だけ

三人は無事かな。私の予測通りなら、環境に適応して、成長を続けていくはず。

「春奈様、もうそのくらいで……」

「もうバテてしまったの？ 他のヒトを呼んでくれる？」

「いえ、私ではなく春奈様のお身体が」

「構わない。情報がなければ、どんなに優れた道具も使いこなすことはできないの」

情報収集を怠った結果、失敗をする人間を何人も見た。目的の為に、ここで妥協はできない。

「無理があると判断したらすぐに休んで下さい。春奈様は世界の希望なのでから」

「ありがとう。そうする」

私は希望などではない。結果的にそうなるかも知れないけど。

「しかし、やはりどうやっても、念術が空間を渡ることは不可能なようですね」

「みたいね。空気を伝うことができるかと思っただけど、空気自体が動くから触れ続けることができないってことか」

「念術そのものが弓や投石に勝る武器にはなり得ませんね」

「敵がそういう攻撃をしてこないとわかっただけでも収穫よ。でも……」

「何か気になることが？」

「それはもう少し考えてみる。それより、次は私に火を点けてみてくれる？」

「……はっ？ できる訳がないでしょう！」

「じゃあ、他のヒトと交代して」

「誰を呼んでもそんなことはできませんよ！」

「敵はするかも知れない」

「……っ！ しかし、だからと言ってそれは」

「私の命と貴方の正義と大切な方を選んで。命を護ってくれるのなら、今、火を点けて」

最初から、私を妨げる選択肢など、存在しない。私は手を差し出す。

「……わかりました」

俯いたまま私の手を握った彼は、震えている。本気で私の身を案じているというのだろうか。

「本気でやって」

意を決したのか、彼の手に力が込められる。

熱い。徐々に腕を伝わり、胸が燃えるような感覚に包まれる。風邪の発熱など比較にならないほど頬が火照り、視界が霞む。

小学生の頃に体験した火事を思い出す。炎に囲まれ、終わりを感じた。死というものはわからなかったが、そこで私が終わることを覚悟した。あの感覚と同じ。炎に触れてもいないのに、自分が焼けるような。

身体を伝わる熱が、足先に迫る。思わず笑みがこぼれてしまう。

名前も知らないまま手を握る彼に、私は言う。

「ありがとう」

入り口の扉を蹴り破る勢いで、衛兵が入ってきた。

「何事ですか！ 春奈様、ご無事ですか？」

私は恐怖を顔に貼り付ける。身体を震わせ、言葉は出さず、口だけを動かす。

少し離れたところには、人型の火達磨が転げまわっている。衛兵の一人が怒鳴りながら部屋を出て行った。しばらくの間を置き、言葉紡ぐ。

「と、突然……彼が……」

「もう大丈夫です。落ち着いて下さい。とりあえず、お部屋に戻りましょう」

なぜ、ここまで予測通りになってしまっただろう。私の目的は本当に果たせるものか、少し考えてしまっ。

「立てますか？ ゆっくりで結構です」

あの様子では、助からない。抱きしめられた状態での対策を考えておかなければ。

【Y】先入観と常識の差

「いまいち実感が無いな。経験値とか、レベルとか、そういうのは他人の基準か。」

「大したもんだな。祐介さんに頼んで良かったよ。」

「これで終わりか？ 盗賊って大したことないんだな。」

「周りには盗賊と呼ばれていた者達が倒れている。当然、殺したりはしないけど。」

「これが報酬だ。それから、こいつは気持ちだ。受け取ってくれ。革袋は金だよな。瓶には何か液体が入っている。」

「腕は認めるけど、無傷じゃないだろ？ ある程度の傷なら、そいつですぐに治る。」

「傷薬ってやつか。ありがたくもらっておくよ。」

「試しに飲んでみる。味はないのか。苦いもんだと思ってたけど、これはありがたい。」

「おいおい！ 何やってんだ！」

「は？ いや、傷が治るんだろ？ くれたんだから、今飲んだっていいだろ。」

「だから、何で飲むんだよ！ それで傷が治る訳ないだろ。」

「もしかして、塗るのか？ 先に言ってくれよ。もったいないな。毒じゃないんだよな？ だったらまあいいよ。」

「毒にはならんさ。逆に、体内に傷があれば治るんじゃないか。」

「便利な薬だな。どうやって作ってるんだ？」

「薬は念術だつて言われてるだろ。聞いたことないのか？」

「ないな。大体、念術は人間しか使えないんだろ？ 何で物が使うんだよ？」

「俺もよくわからんが、誰かを護りたいとか、そういう思いを抱いたまま死ぬ人間がいるんだとき。そうすると、最後に触れていた物にその念が宿り、その念が強いと傷も治すことがあるらしいぞ。」

「つてことは、作ろうと思って作れるもんじゃないのかよ？」

「そうだな。次からはもつたない使い方するなよ」

確かに。誰かが命懸けで作ったと思うと、ほいほい使えるもんじゃないな。その為に死んだ訳じゃないだろうけど、できるだけ使わずに済ませよう。

「ところで、国境までは、本当に三日もかかるの？」

「たった三日、だろ。歩いたら一月以上かかるはずなんだから。馬に感謝しないと」

馬に乗るのとかカツコイイと思ってたけど、そんないいもんじゃない。尻が痛いなんの。何でこの世界には馬車がないんだよ。

「あーあ。じゃ、そろそろ行くよ」

「行くつて国境へか？ あんな危ないところへそのまま行くつてのか？」

「そのままつて？ 何か楽な方法があるなら教えてくれよ」

「いや、他国とは戦争してるんだぞ？ 鎧もなしつて、すぐに死んじゃまうぞ」

「城で着けてみたけど、あんな重いもん着けて動けないつて。馬も嫌がるよ」

「冗談じゃなさそうだな……。しょうがない、村の伝説を教えてやるから今日は泊まっていけよ」

伝説！ それっぽいな。面白くなってきたじゃないか。ドラゴンとか出てくるのかな。

【S】憧れは目標となる

予想以上に充実しているな。この世界も悪くない……が、元の世界に戻らない訳にはいかない。

「修一様、そんなに根を詰めては、お身体を壊してしまいます」

「兵士に対して、様はおやめ下さい。それに、姫君が個人に肩入れするのはどうかと」

「私はただ、貴方を心配して……」

「お待ち下さい。お気持ちはありますが、やはり、甘んじる訳にはいきません。他の兵士の士気にも関わります」

姫は何か言いかけたが、口を閉じて去って行った。あまり距離が近くなるのは困る。俺が姫に恋でもしようものなら、元の世界に戻る障害になる。その逆も、あり得ない話じゃない。元々妙な先入観が距離を縮めているんだ。お互いが勘違いに気付かず結ばれても、結末は目に見えている。

「シユウも固いな。お前、いつもそんなに疲れないのか？」

騎士団長が声をかけてくる。

「アルさん、黙ってないで途中で助けて下さい」

「お前以外は皆、楽しんでるんだ。お前の為に皆を犠牲にはできんよ」

笑いながら言う。少しづつ信頼関係ができていくということか。

騎士団員はみんないいヒトだ。

「しかし、さすがだな。手合わせした日から一月でここまで伸びるとは」

「まだまだです。足りないものが多過ぎて」

「よく言っぜ。もうお前に勝てる団員なんかいないだろうが」

「アルさんが本気で相手してくれるようになったら、やっとスタート地点です」

「やれやれ。こんなに訓練ばかりしやがって。お前、病気なんじゃ

ないのか」

「そうかも知れない。俺は存在理由を求めているんだ。俺を必要としてくれたこの国に、姫に、応えたい。存在理由がなくならない限り、努力をやめる訳にはいかない。生きることをやめる訳にはいかない。」

「もう一度、お願いします」

誰かの気配がする。こんな夜更けにここへ来られるのは、城内の人間か、賊か。呼吸を整え、気配を消す。

「そう警戒するな。俺だ」

「アルさん、何してるんですか」

まあ、そう簡単に賊が侵入できるはずはない。わかってはいたが、声を聞いたことで警戒を解き、明かりを点ける。

「それは俺からも聞きたいね。俺は巡回だよ。団長つてのは大変だな」

「寝巻きで巡回はできませんよ。そもそも、いつもは外周の巡回で、兵舎には来ないでしょう」

「よく知ってるな。お前、次の団長やれよ」

「俺には荷が重いです。それに、その前に俺は帰ります」

「その話なんだがな、シユウ。こっちに残」

「アルさん。話したはずですよ。俺は器用じゃないんですよ。迷いを持ったら、何もできません」

「だったな。ところで、剣の持ち手が逆だな」

目聡いヒトだ。敵にはしたくないと改めて感じる。

「二刀流の練習なんです。他言無用でお願いします」

「訓練で本気を出していなかったのは、お前の方だったみたいだな」

「実戦で使えるレベルじゃありませんよ」

「二刀流の話じゃねえよ。お前、左利きだったんだな」

恐ろしいヒトだ。利き腕での練習は一人でしかやっていない。ア
ルさんも今日初めて見たはずなのに。このヒトを超えるのは、予想
以上に難しそうだ。

「あまり無茶をするなよ。万全の心身を維持するのも騎士の務めだ」
このヒトに言われると、素直に聞きたくなる。俺も、誰かの支え
になれるような男になりたい。

【A】運命と無力と希望

落ち着いて考えてみると、気付くことって多いなあ。疲れる。

「お口に合いませんか？」

「ねえ、デューク。いい加減に敬語はやめようよ」

「名前を覚えて頂けましたか！　ありがとうございます」

「アタシの話聞いてよ……ねえ、もう一回ちゃんと確認しておきたいんだけど」

溜め息を飲み込み、聞いてみる。

「アタシがここに来てからずっと、デュークが色々世話焼いてくれてたじゃない。で、思ったんだけど、どう考えてもアタシよりデュークの方がすごいのよ」

デュークはアタシの目を見たまま、黙って聞いている。

「救世主って、何？」

「私達を救う方です」

「アタシに何ができるの？　戦えないし、念術もうまく使えないし、デュークの方がよっぽど救世主みたいじゃない」

「そうだとしたら、貴方が私達の救世主です」

「意味わかんない。アタシが何もしなかったら、誰も救われないんじゃないの？」

「そうだとしたら、それが私達の運命なのです」

そんなのおかしいよ。運命って変えられないものでしょ。アタシの行動で国のみんなの運命が変わるなんて、信じられない。

「綾香様。救世主だから何かをするわけではありません。貴方が救世主だから選ばれたのです。貴方が思うように行動し、綾香様として在ることで、結果として私達は救われるのです」

「やっぱり、わかんないよ。確かに、みんなを救えるならそうしたいって気持ちはあるんだ。でも、アタシにそんな力があるとは思えない。どうすればできるのかわかんないよ」

「思うようにして頂くこと、それが一番です。私達にできるのは、できる限り綾香様の力となり、信じ続けることだけなのです」

「そうだ。最初からずっと。何で誰一人として、アタシに疑問を持たないんだろう。それがこの世界のヒトの運命ってこと？ 何の力もない、突然現れた人間を信じるだけ？ そんなの、ひどい。アタシにできることを考えなくちゃ。」

「アタシ、もつと知らなくちゃダメだ。世界のこと、みんなのこと。話して、デューク」

アタシのやることは決まった。何でもつと早く考えなかつたんだらう。

「間違いないんだよね？ アタシが来たのも伝承の通りなんだよね？」

「ええ。それほど重要なことなのですか？」

「四つの国。予言の時が来ると、救世主が現れると同時に、他国には世界を破滅させる邪神が現れる。ちゃんと聞いていたらもつと早く気付いたのに！」

「すぐに侵攻をやめさせて。邪神なんていない。和解で戦争を終わらせるの」

「何かお考えがあるのですね。私達に戦の意思がなくても、他国が応じるとは限りませんが」

「大丈夫。きつとできる」

みんな、無事だよ。ちゃんとみんなまで帰ろうね。

【H】者をも利用するか物をも理解するか

そろそろどこかで戦いが激しくなってもおかしくない。自分の手札を整えておかないとね。

「春奈様。少しお休みになって下さい。念術のリスクは理解されているはずですよ」

確かに、続けて使い過ぎたかも知れない。頭痛がひどくなっている気がする。

「常人ならば既に倒れるほどの疲労を伴っているはずですよ。なぜ、そこまで……」

「私は目的の為に仲間を犠牲にしたの。これは私の礼儀なのよ」
喋り過ぎかな。やはり、疲れている。

「やっぱりダメね。薬も武器も作れない」
「我々の方も進展なしです」

薬に関しては、念が弱いということか。死を目の前にした者とは、比較にならないのも仕方ない。武器は逆に、念を詰め過ぎればその場で燃え上がるし、抑えれば攻撃能力を持たない。

「ねえ、念術で直接殺すようなことはできないの？」

「と、言いますと？」

「例えば、触れた相手の死を願ったりして」

「それは不可能でしょう。念術の原理は付与ですから。自身が持っているものを与えることで成り立つのです。理論上、自身が死んでいる者でなければ、相手を殺すことはできません」

「じゃあ、恐怖や記憶を与えることはできるの？」

「可能でしょうね。ただ、鮮明なものでなければ、相手の経験に埋もれるだけですよ」

なるほど。忘れられないような恐怖や痛みを鮮明にイメージできれば、強力な武器になる。

「火を点けたり、傷を治すのは、物理的な干渉のように思うだけ

ど、違うの？」

「あくまでも精神的なものです。例えば点火ですが、あれは燃えるイメージを与えている訳です。対象が【燃える】と実感すれば燃えるのです。傷も同じです。【治る】と実感すれば治ります」

「気になっていたんだけど、物にもそれが通用するよね？」

「そうですね。物から念術を受けたという前例はありませんが、物にも意思があるということでしょう。熟練者ならば、物を介して念術を使うことも可能かも知れません」

「ということは、地面からの念術で軍隊を攻撃することも可能。その前に術者が倒れるだろうけど。」

「詰まるどころ、念術とは信じる力です。まず術者自身が実感を持つていなければ、通用しません。こんなに熱かったら燃える、こういう傷は治る、といった自身の経験を相手に教えるということですよ」「ありがと。よくわかった」

あの時私が燃えなかったのは、私のイメージの方が鮮明で、強かったからか。だとすると、意図的に跳ね返すようなことは不可能になる。相手より経験で劣る場合は、死に直結する可能性もある。溺れたり、瓦礫の下敷きになった経験のある者がいたら、恐ろしい相手になる訳か。伝えるまでに時間がかかるという弱点を考えると、戦闘中には使えないから……

「また考え込まれているようですが、今日はもうお休み下さい。顔色が先ほどより悪くなっています」

「そうする。おやすみなさい」

寝室に戻ってすぐ、ベッドに入る。布団の温もりが懐かしく感じる。物にも意思がある、か……。

【Y】お約束と言っていていられたのはそこにいなかったから

村で聞いた伝説の洞窟に来てみたけど、本物の洞窟って初めて見たな。

「案内ありがとな。道も覚えたし、もう帰っていいよ」

「そうはいきません。村の代表として、貴方を見張る義務があります」

「見張るって……村を襲ってた盗賊を退治したのに？」

「作戦かも知れませんが」

おいおい。大体、伝説のことだって俺から聞いた訳じゃないのに。この手のコは何言っても聞きやしないんだよな。

「何か出てきても、お守りはできないかもよ？」

「失礼な！ 自分の身くらい自分で護ります」

「はいはい……じゃ、これ持つとけよ。村で一本持たされたからさ。絶対必要になる、と渡されていた剣を差し出す。どうせ二本もあつたって使わない。もしかして、このコに渡す為に持たされたのか？」

「こんなもので、私の心は動きません」

「はあ……もうちょっと楽にしろよ。そんなに何でも疑ってたら疲れただけだぜ」

「貴方が信用できると判断したら、そうします」

「了解つと。んじゃ行きますか」

こいつは予想以上にゲームそのまんまだな。見たことあるヤツばっかだ。

「こいつで終わりつと。コウモリってのは剣で戦うもんじゃないな。

……おい！ 大丈夫か？」

「大丈夫です。貴方こそ、空振りし過ぎです。それでは先が思いや

られます」

仕方ないだろ。的が小さい上に、お前を気にしながら戦ってたんだから。

「こんな時まで減らず口叩いてんじゃねえよ……。ほら、傷になつてんじゃん」

「ちよつと！ 放して下さい！」

「つと、悪い。随分照れ屋さんなんだな。傷薬持つてるか？」

「必要ありません。この程度の傷は念術で治せます」

「自分には使えないって聞いたぜ？」

「貴方が治してくれる気はないのですね？」

触ったら怒るだろ。まあ、どつちにしても……

「悪いけど、俺は念術が使えないんだよ。教わって練習したけど、よくわかんないんだよな」

「使えないヒト」

「お前なあ……。可愛くないぞ」

「私にはルイという名があります」

もう、疲れた。面倒くさいコは苦手なんだよなあ。

「とりあえず、傷薬塗つとけよ。まあこれも村で持たされたんだけど」

あと林檎も持たされたけど、剣も傷薬も、全部ルイの為のものなんじゃないのか？

「こんなもので、私の心は動きません」

「知ってるよ。早く塗れ。何か厄介なものが見える」

数メートル先から開けた空間になっている。奥の方には、ゲームでしか見たことのないアレがいる。

「あれは……。伝説の通り！ やはり、倒さねば宝は得られません」

「一応確認だけど、あれって何？」

「最強と呼ばれる生物、ドラゴンです」

やっぱり。

【S】覚悟の重み

実戦も増えてきた。今回の防衛戦は勝利したが、もっと経験を積んでおきたい。できる限り、前線に出なければ。

「大したもんだ。ここまでできる奴はなかなかいない」

「アルさんには敵いませんよ」

「お前、まだ敵を殺したことがないだろう」

戦いながら、どこまで見ているんだ。このヒトは底が知れない。

「お前が技術を磨いていたのはその為なんだろうが、甘さが仇になることもある。止めを刺せとは言わないが、本当に護りたいものを護るには、犠牲が必要なこともあるぞ」

「それは最初から、覚悟してます」

「みただいな。お前は本当に底が知れないよ」

「ところで、和睦の会議を申し込まれたという噂がありますが」

「シユウ……どこから仕入れてくるんだ。本当の話だが、まだ広めるな」

この機会は逃せない。

「その使者を任せてもらうことはできませんか？」

「何か思うところがあるのか？　だが、残念ながら、国主同士の直接交渉という話だ」

「では、護衛に付けて下さい。姫が単身で会議に出向くなどあり得ません」

「わかったわかった。当然、護衛は付ける。お前に騎士団の留守を任せ俺が行くつもりだったが、交代しよう。お前なら安心して姫を任せられる」

春奈さんの言葉をそのまま受け取るならば、この世界に全員いるはずだ。この国に誰もいないのだから、他国の情報は少しでも欲しい。運が良ければ、会議の席で誰かに会えるかも知れない。

なかなか上手くないかない。高等技術なのは間違いないが、一度も使い手を見たことがないということは、そもそも不可能なのか？

「精が出るな」

「アルさん。気配を消して入って来るのはやめて下さい」

「普通に来たよ。それだけ集中していたってことだろう」

「嘘でしょう。俺は何か集中していても、周囲への注意は怠りません」

「はは、集中力が足りないな」

「逆に、何かに夢中になると周りが見えないというのは、集中力が無いんだと俺は思いますけど」

「そうかも知れないな。お前の発想は面白い」

相変わらず、捉えどころのないヒトだ。こういうヒトが一番怖い。

「……用件は何です？」

「そう邪険にするなよ。面白いつてのはお前がやってる訓練だ」

「二刀流がですか？ 実用性がないから誰もやらないんじゃない？」

「食えない奴だな。まあ隠したいならそれで構わないが、その訓練は負荷があり過ぎる。身体を壊す前にやり方を変える。護衛の話も見送らざるを得なくなるぞ」

このヒトの観察眼はどうなっているんだ。俺は今まで、本気で隠そうとしたことを見破られたことなんてなかったのに。

「お見通しですか。訓練時間を減らして、密度を濃くしてみます。

護衛に支障を出さないように、十分注意します。それから、この件は

「他言無用な。わかってるよ。もし、モノになったら、お前は並ぶ者のいない剣士になる。期待してるぜ」

【A】自分にできること

多分、和解に応じてくれない国もある。他の手も考えておかない
ちや。

「綾香様。玄武国が会議に応じました」

「ホント!? それってアタシも行けるかな?」

直接会えないと確認もできないし、早く知ってるヒトに会いたい。
「綾香様がお望みであれば、護衛として同行可能ですが、危険が伴
います」

「デュークも行くんでしょ? だったら、護って」

「非力の身ながら、約束しましょう」

「その玄武国の情報はあある?」

「経済や人口ということでしょうか?」

うーん。政治的なことを聞いてもよくわからない気がする。でも、
政治的な会議だし。

あまり深く考えてなかったなあ……どうしよう。

「そういうのは、とりあえずいい。邪神に関係あることとか、有名
なヒトとか、会議に来そうなヒトとか、わかる?」

「諜報員によれば、邪神は綾香様と同時期に現れたようです。向こ
うでは救世主と呼ばれていたようですが、城から確かに発表があつ
たという報告を受けています。ただ、その後は救世主が話題に上が
らず、本当は現れていなかったのではないかという噂が、城下に広
まっているとのことですよ」

「ってことは、隠してるのかな? 生きてるのは間違いなさそうだ
ね」

「現れたという情報が真実ならば、ですが」

状況を考えれば、やっぱり、四つの国にバラバラにみんながいる。
騒がれていないってことは、玄武国にいるのは多分祐介君じゃない。
シユウ君かハルがいる。

「最近、有名になったヒトとかはいない？」

「玄武国の者で名が知れ渡っているのはアルバートという騎士ですが、有名なのは随分前からです。他にはいませんね。最近になって凄腕の騎士が現れたという情報もあります。名はわかりませんが、剣術はアルバートと並び、相手に止めを刺さないという、妙な騎士だそうですね」

その騎士だとすればシュウ君っばいけど、ハルだつて剣とか普通に扱えそうでもないなあ。全然関係ないヒトの可能性もあるし。これだけじゃわかんないや。

「それだけ強いヒトなら、護衛で会議に来るよね？」

「そうですね。少なくともどちらか一人は来るでしょう。国主同士の会議としているので、相当に腕の立つ人間が付くはず。二人とも来るかも知れませんか」

よく考えてみれば、こんなに短期間でトップクラスの騎士になれるのかな？ アタシは剣なんて重くて振るのもやっとなんだけどもあまり期待するのはやめておこう。

「他の国に動きはないの？」

「返答に困っているのでしょうか。使者が戻っていないので、期間を引き延ばす為に歓迎されていると見て間違いありません」

「カントイって何？」

「手厚くもてなすことです。豪華な食事や宿を用意したり、場合によっては夜伽もあり得ます」

「ヨトギってのは何？」

「それを聞いてわからないのであれば、知らない方が良いでしょう」「それじゃ困るでしょ。逆に使者が来たら、アタシがしなきゃならないかも知れないじゃない」

「いや、夜伽なんて綾香様がする機会はありませんよ……」

【H】それぞれの思惑

和睦の使者か。面白い発想だけど、それじゃ私が困る。逆に利用させてもらおうかな。

「しかし、青龍国にこんなに美しい方がおられたとは。私はついでいる」

「貴方のように素敵な方にお褒め頂いて光栄です」

場慣れしているみたい。緊張が感じられない。交渉を長引かせても不利かな。

「和睦についてはどうお考えですか？」

「少し時間を頂けないかしら。素敵な提案ですから、国としての総意を統一した上で、返答としたいのです。城内に個室を用意させますので、どうぞ、長旅のお疲れを癒して行って下さい」

「しかし、長くは留まれませんぞ。申し出はありがたいですが、国では返答を待っておるのです」

大体、掴めた。このヒトは私欲が優先するタイプ。

「明日には素敵な土産をお持ち頂けます。返答は今宵、私がお部屋に伝えに参ります」

「なるほど、そうですね。では、今夜はお世話になるとしましょう。貴方は交渉術に長けていらっしゃるようですな。参りました、はっはっは」

おそらく、他の国にも使者は出されているはず。同盟や降伏は防いでおかないと、勢力が及ばなくなってしまう。

「精鋭を集めて、小隊を三つ作って。留守は貴方に任せるから」

「春奈様はどちらへ？」

「小隊の一つに同行するの。国境を越えるつもりだから、しばらく

戻れないと思う」

「危険です！」

「約束したはず。国の指針は私に任せると。私は剣を取って戦えないのだから、別の方法で戦う」

「は……。朱雀国の使者はいかが致しますか？」

「城からは出さずに情報を引き出して。用が済んだら始末して構わない。返答の使者も出さないで。向こうから動きがあったら、最初から使者など来ていないという姿勢で応対して」

「では、早束手配致します」

馬も人間と同じか。何を考えているのかを読み、誘導してあげれば、思う通りに動く。初めての乗馬も苦にはならない。

「では、手はず通り、我々の隊は玄武国の関所方面に向かいます」

「我々は朱雀国方面ですね」

「お願いね。接触できることを期待してる」

二小隊を見送る。こちらも動かなければならない。

「では、我々も発ちましょう」

「どのくらいかかりそうなの？」

「白虎国は青龍国から一番遠いですからね。早馬を飛ばしても一週間ほどはかかるかと」

「私に気を遣う必要はないから、最小限の休息にして。対象を見落とさないように十分注意してね」

「仰せの通りに」

戦いは動き出した。待ってるよ、みんな。

【Y】身一つで負うもの

おいおい。シャレになつてないぞ。寝てるみたいだけど、口の前辺りが燃え上がってる。

「あれ、寝息だよな？ 炎を吐くとか、人間が戦える相手じゃないぜ」

「伝説の宝を護る者ですから、強いのは当然でしょう」
「帰るか」

「やはりその程度でしたか。貴方は勇者ではありません」
「そんな肩書きに興味はない。」

俺だけならまだしも、ルイが一緒じゃ逃げる事だって難しい。こんな状況で戦闘にでもなったら、下手すれば俺かルイ、最悪二人とも死ぬ。

「大体さ、人間同士の戦争に、伝説の宝なんて大袈裟だって。重さを感じない鎧なんて、あれば便利だけど、鎖帷子でも代用できるんじゃないの？ ってことで、帰るぞ」

「では、貴方一人で帰って下さい」
「おい。駄々こねてんじゃないよ。置いて帰れる訳が……」

泣いてるのか？ 参ったな。こういう時にかける言葉はわかんねえ。

「いけませんか？ やっと、待ち望んだ救世主が現れたんです。村を救ってくれて、今度は国を救おうという勇者が。少しでも力になりたい。自分だって、何かしたい」

小さな身体を震わせ、消え入りそうな声を搾り出している。何も言えない。

「力がないからって、ただ救われるのを待つだけなのは嫌なんです。私は、努力しても剣士にはなれなかった。一緒に戦う力はありません。せめて、一緒に命を懸けて……できることをしようと」

合ってるような、間違ってるような。まあ、ヒトそれぞれだから、

細かいことは俺が言っても仕方ない。

「ありがとな。何か、その気持ちは嬉しいわ。でもなあ、もしルイが死んだら困るんだよ。村のみんなだって、俺だって、伝説の宝なんかより、ルイの方が大事だぜ？」

「そ、そんな言葉で、私の心は動きません」

「いや、動けよ……。宝探しは中止だ。帰るぞ。残念ながら、あれは俺の手に負える相手じゃない。挑んでみたら負けました、ルイも巻き添えにしました、なんてことになるのは目に見えてる」

今度はルイが黙った。

「俺は救世主を放棄する訳じゃない。この宝なんてなくなっても、戦うことはできるんだ。お前もさ、変な意地張ってないで、ちょっと考えてみるよ。努力しても剣士になれなかった、なんて諦めるのも早いぜ。剣士になれるまで努力する、でいいだろ。戦場にいなくていいんだ。俺は救世主なんて呼ばれてるけど、政治のことなんて全然わかんねえし、食べ物作ったりできる訳じゃない。それぞれ、みんな役割があるんじゃないのか」

何か、自分でもよくわからんことを言ってるような。まあ、ルイも納得しそうだし、大丈夫だろ。

自然の光が懐かしいな。洞窟の中にいた時間はそんなに長くないはずだけど。

「さっきは、その、ありがとございました」

「お、やっと喋ってくれたか。礼を言われるようなことはしてないけど」

同時に俺とルイの足が止まる。俺はさっと周囲に視線を走らせた。前に二人、後ろに二人。

「ルイ、そっちの崖に背を向けて少しずつ下がれ」

小声でルイに言い、ルイを背にする位置に立つ。

「剣を抜いてるってことは、物騒な用件だよな？ 女連れだから見逃してくれって訳にうわっ！」

いきなり斬りかかってくるかよ。くそっ。腕が盗賊の比じゃねえ！ こんなの四人相手じゃルイが！

「きゃあああああっ！」

「ルイっ！ くそっ、邪魔するな！」

ルイを追って崖を飛び降りようにも、まだ三人も邪魔がいる。くそっ！

「いやあああああっ！」

ハルちゃん？ ああつくそっ！

【S】平穩は不穩へと

街道から少し距離を置いて広大な森林が見える。ゲームでは数歩で済む道程だ。すれ違う商人や動物の鳴き声、景色など、目の前にすると、これはやはりゲームではないのだと実感する。

「シユウさん。今日はこの辺りにしましょう」

手を挙げて応え、道の端へ出たところで手近な木に馬を繋ぐ。

「日が沈む前に薪と水を集めてきます」

「シユウさん、そんなのは私達がやります。姫の護衛をお願いします」

「しかし、いつも俺が護衛を……」

「重要な仕事ですからね。副団長なんだから、雑用は私達に任せて、堂々として下さい」

姫と二人きりになると気まずい。意図的に距離を取ってはいるが、二人きりでは会話せざるを得ないから困る。

「あ、あの……」

「はい」

一応姫の方は向いたが、顔は見られない。相手が王子だったらこんな苦労はなかったのに。

「私も、その……。シユウ様と呼んでも良いでしょうか？ 皆、そう呼んでいるようですので」

「ですから、様はやめて下さいと何度も申し上げたではありませんか」

未だに俺を特別扱いしているのは、姫だけだ。両親を亡くしているのは聞いているが、厳しく育てられたんだろうか。

「そ、そんな……いきなりシユウと呼べと言つのですか！」

「姫なので、おかしくはないと思いますが。団長のことはアールと呼ぶでしょう」

皆、早く帰って来てくれ……。

姫は静かな寝息を立てている。野営など過去の生活ではあり得なかつただろうに。

「シユウさん、少し休まないと持ちませんよ」

「ありがとうございます。でも、明日には着くだろう」

「会議の時間が一番危険ですからね。万全で臨まないと」

「そうだな。次の見張りを終えたら、休むよ」

「そうして下さい。何なら順番交代しますよ。あ、来ましたね」

草を踏みしめる音が近付いて来る。交代の時間だから、呼びに来たのだろう。

見張りは常に二人で、二時間交代。一時間ずつずらしているから、呼びに来る時も一人は見張りを続けている。茂みの向こうに人影が見えた。

「それじゃ、私は行きますね」

「待て」

小声で呟く。気配が一つじゃない。俺はその人影に向かって声をかけてみる。

「カイルか？ お疲れ様」

「ありがとうございます」

兜の奥から返事をしながら、近付いて来る。

「シユウさん……」

「油断するな」

俺は剣の柄を握り締めた。

【A】戦つといつと

こんな山道を行くなんて、考えてもいなかった。崩れたら死ぬんじゃないの？ 馬が暴れたら落ちるんじゃないの？ 何でみんな平気なのよ。

「綾香様？ お疲れですか？」

「デューク！ もうちょっと安全そうな道はないの？」

王様は笑っている。近衛兵のヒトも笑っている。何なのよ、もう。街道には盗賊、山道には山賊が出ます。城を出たらどこも同じですよ」

恐ろしいことをさらつと言う。そして、海路には海賊がいるってか？ 帰りたい……。

「綾香様。そこで止まって下さい」

カーブした道を越えたところで、向こうから近付いて来るヒト達が見えた。とりあえず言われた通りに止まる。声が届く距離まで来たら、デュークが馬を降りて喋り出した。知り合いかな？

「綾香様。王様と共に、来た道を引き返して下さい。すぐに追いつきます」

近衛兵のヒトが言って、デュークの方へ向かって行く。これって、あのヒト達が敵ってこと？ 山賊？

「少し離れた方が良さだろう」

「王様は先に行って下さい。アタシはここにいます」

「それを聞いて私だけが逃げる訳にはいかぬよ。せめて、少し下がりに下さい」

すごい。目の前で戦ってる。怖くて動けないけど、目が離せない。デュークは弓で戦ってる。放った矢が燃えてるけど、念術なのかな？

剣がぶつかり合った時に、ものすごい金属音が響き渡る。胸の奥

を挟り取られるような、重い音。映画とは違う。あんなの、斬られたら死んじゃうよ。戦争ってこんな戦いが続くの？ アタシが知らないところでも、誰かが傷付いて、誰かが痛い思いをして、誰かが命を落として。知らないヒトが見えないところでそうなっても、ちやんとわかってなかった。怖いよ。自分が死ぬことより。自分の知ってるヒトがいなくなるかも知れない。嫌だ、そんなの。

「デューク！ 死んじゃだよ！」

誰も死なないのが一番。そう思った。自分の周りだけ助かればいいってのはおかしいって。でも、デュークが死なずに済むなら、あの敵を倒して欲しいって思う。どちらかしか生き残れないなら、デュークに生きていて欲しいって思う。

アタシのやるうとしてたことは理想で、現実をわかってなかったんだ。きつとデュークも、近衛兵さんも、王様も、みんなわかってた。それでも、アタシのやるうとしてることを命懸けで信じてくれたんだ。ごめんね、みんな。アタシ、戦うってことわかってなかった。

「綾香様！ そちらに一人！ 早くお逃げ下さい！」

デュークの声がする。逃げる？ アタシだけが？ 足が動かないよ。敵は近付いて来るのに。

アタシの身体、浮いてる？ 空しか見えなくなっちゃったよ。

「痛っ！」

お尻から地面にぶつかつた。王様の脚が前にある。すごく安心する。護られてるって感じる。これなら動けそう。

立ち上がるうと腰を上げたアタシの目の前に、剣の切っ先がある。「嘘……でしょ？」

脚から力が抜ける。座り込んだアタシの足先に、何かが染みを作っている。ぽつ、ぽつ、と音を立てながら、それは一つずつ増えていく。やがてそれは交わり、大きな一つになつていく。

視線を上げると王様はアタシを見て、微笑んでくれている。聞こえない何かをアタシに言つて、ゆっくりと崖の方へ動いて行く。ア

タシは、何が起きているのかわかっている。これから、どうなるのかもわかっていいる。でも、動けない。声も出ない。ただ、王様の笑顔に見入ったまま、震えているだけ。

アタシの視線が地面の端を映した時には、誰もいなくなった。

【H】再会

悲鳴なんて上げたのはいつ以来だろう。少し身体が震えている。

「一時間おきの狼煙を三回上げたらそれが合図よ」

「くれぐれも、お気をつけて」

「大丈夫。私には自信があるの」

木々の隙間から、祐介が戦う様子が見える。距離が開いているから、向こうからはまず見えない。

「何が目的なんだよ！」

祐介だけが声を上げている。それでも精鋭四人を相手に優勢だなんて、天才というのは伊達じゃない。既に二人が倒れているんだから、あまり時間がない。

「ハルちゃん！ 聞こえたらこつちに逃げて来い！」

思わず笑みがこぼれる。ゆっくりと立ち上がり、少し厚めの生地のできたスラックスを脱ぐ。着ているブラウスを胸の辺りで掴み、両側から思い切り引っ張る。飛んだボタンが少し転がる。ブラウスとスラックスにナイフで少し切れ目を入れ、そこから力任せに引き裂く。それを繰り返す。

「どけって言っただよ！」

祐介の方へ目を戻すと、立っているのは一人になっていた。

「ハルちゃん！ 聞こえたら返事しろ！」

私は木を背にして座り、スラックスを無造作に抱きしめた。

「ハルちゃん！ 聞こえないのか！」

祐介の声が少し近付いてきた。顔を伏せ、目に涙を溜め、少しずつ、しゃくり上げるように声を漏らす。

「ハルちゃん！？ すぐ行くから！ 動くなよ！」

近くの茂みが音を立てる。ヒトの気配がすぐ近くに来た。

「ハ……ルちゃん？」

私はゆっくりと顔を上げた。

【Y】特別

何だよ、これ。ふざけんなよ。やっと知ってる顔見つけたと思ったら、最悪じゃねえか。

ボロボロのブラウスは、あちこちから肌色を見せている。脚を隠すものは無いまま、膝を抱えて震えている。

「とりあえず、これ」

上着を一枚脱いで、ハルちゃんにかけた。ハルちゃんはそれをぐっと掴むと、首から肩を隠すように覆った。俺は黙って横に腰を下ろした。

どれくらい時間が経ったのかわからない。木々の間から差す日が橙に染まっている。

手に何かが触れた気がして目をやると、ハルちゃんの指が当たるか当たらないかの位置にあった。俺は視線を戻し、ハルちゃんの手を握り締めた。

日が沈み、鈴と笛を混ぜたような、虫の鳴き声が響いている。

「身体、冷えちゃうよ。俺、少し離れてるから、服をちゃんと待って」

ハルちゃんが俺の手を掴んでいる。震えながら、爪を立てて。

「離れないで」

ハルちゃんが顔を上げた。薄暗くてもわかる、整った顔立ち。その瞳に吸い込まれそうになる。顔を上げたせいで、抱えた膝の内側が目に入ってしまう。

「お願い」

そう言って、俺の腕にすがりつくようにして泣き出した。

これが、ハルちゃん？ いつも自分で何でもやってたから、強いコだと思ってた。普通の女のコじゃねえかよ。

「どこにも行かないよ。ずっとそばにいる」

言いながら、ハルちゃんを抱きしめた。ハルちゃんの手も俺の背に回る。力いっぱい身体を締め付ける腕に、俺も力いっぱい応えた。シャツに涙が染みってくる。

「祐介君」

そう言っただけで顔を上げた瞬間、もう抑えられなくなった。少し強引にキスをする。すぐに唇を離れたけど、目が合った瞬間、どちらからともなく、もう一度唇を重ねた。腕に込められた力が一瞬抜け、すぐに、より強い力が込められる。そのまま、窒息するかと思うほどに、互いを求め合った。

「どこにも、行かないで」

絶対に、俺が護ってやる。

【S】努力が生んだもの

二つの剣先を突きつけられた何者かが動きを止めた。

「騎士団にカイルという者はいません」

「目的は何だ」

俺達の言葉に反応は見せない。こいつに注意を向けて姫を狙うところか。

「姫！ 敵襲です！ 起きて下さい！」

言いながら敵の脚を斬りつけ、姫の近くへと移動する。

「剣だけ奪っておいてくれ」

「わかりました。しかし、シユウさんよく気付きましたね」

「油断するな。あと二人はいるぞ」

その言葉を聞いたタイミングで敵が二人、姿を見せた。他にもう一人いる可能性が高いな。

「アルバートの姿がないな。留守番か」

二人とも隙がない。かなりの腕前と見て間違いない。

「シユウ……？ これはっ！」

「敵襲です。俺の後ろにいて下さい」

金属音が森の静寂を破る。

「こっちは私にお任せを！」

これで一対一。だが、もう一人潜んでいるはず。警戒は解かず、目の前の敵は背後に通さない。それが、今の俺のすべきことだ。集中しろ。

「さて、こっちもやるうか」

言葉より先に斬撃が届いたと思うほど、早い。受けた剣からものすごい振動が伝わってくる。

「シユウさん！ 左っ！」

その言葉を聞くより早く、俺はもう一本の剣で斬撃を受け止めた。そのまま剣を抜き、左の敵を鎧ごと貫いた。

「二刀流……しかも、鎧を貫くとは！」

正面の敵が距離を取る。向こうでもう一人の敵が倒れた。

「シユウさん、そんな技を隠していたんですか！ すごいです！」

「もうお前に勝ち目はない。目的と所属を話してもらおうぞ」

前後を挟んで死角を突き、敵の剣を弾き飛ばし、身体を木に縛り付けた。

「春奈という女を預かっている。朱雀国に降れば解放してやるぞ」

ハルナ……少なくとも、玄武国のヒトでは聞いたことがない。欧米を思わせるような名のヒトばかり。他の国もそうだとすれば、春奈さんのことだと見て間違いない。確かめる必要がある。

「シユウさん！ 自害されました！」

この襲撃の目的がわからない。春奈さんの名を出して通用するのは俺だけだろう。最初から俺が狙いだっただのか？ どちらにしろ、その名が出た以上、つながりがあるはずだ。

「姫を連れて、城へ戻ってくれ。会議は中止だ」

「シユウさんはどうするんです？」

「俺は朱雀国に行く。戻ったら、アルさんに全てありのままに報告してくれ」

「シユウ……その春奈という方は、大切なヒトなのですね？ もう、戻って来ないつもりですか？」

戻って来られる保障はない。最悪の場合、敵対する可能性もある。だが、姫の信頼を裏切るつもりはない。俺は行くべきじゃないのか？

「貴方らしくありません。やると決めたのなら、やり遂げるまで努力するのが貴方でしょう。大切なヒト一人を護れずに、国を護れるはずありません。その方を救い、戻って来て下さい。信じて待っています」

「姫……ありがとうございます！」

【A】約束したから

デュークの声がする。アタシに言ってるのかな。わかんないや。

「やむを得ん！ 綾香様を！」

地響きがする。地面に合わせて、アタシも揺れてる。近衛兵さんが走って来る。

「え？ ちよっと、きゃあああああ！」

地面が崩れてる。みんな、落ちてゆく。アタシも落ちてる。何かに掴まらなきゃ。手を動かしても、何も無い。時間が止まっているみたい。落ちるってこんな感じなんだ。

あれ？ 今、何してるんだっけ？ 身体が重い。

「ああ、良かった！ 私がわかりますか？」

「デューク？ あれ、アタシ寝てる？」

「そのまま置いて下さい。傷と痛みはすぐに癒します。気を失っている時は念術がうまくいかなくて困りましたよ」

デュークも傷だらけ。上着を裂いて腕を縛ってる。胸の辺りは包帯でぐるぐる巻き……。

「デューク？ 胸に巻いてるのって、もしかして」

「さらしが珍しいですか？」

どんなに鼻屑目で見てもアタシのそれより膨らんで見える。

「デュークって、女のヒト……？」

「思ったより元気そうで安心しました。私は女ですよ」

いつもローブ羽織ってて、背も高いし、ハスキーな声だから、男のヒトだと思ってた。

「私のことを男だと思っていたようですね。ひどいです」

デュークは笑っている。この笑顔を見ると、安心する。性別なん

て関係ない。

「恐ろしい念術だな」

アタシとデュークの視線が同時に声のした方を向く。そうだ。襲われたんだ、アタシ達。

「綾香様。私が合図したら、その川に飛び込んで下さい」

デュークが囁く。何か考えがあるんだよね。言われた通りにする。敵から視線を逸らさずに、ゆっくりと川に向かって下がって行く。デュークもゆっくり下がっている。剣持ってる相手に丸腰で戦えるのかな。でも、さっきの崖崩れがデュークの念術だとしたら、剣にも勝ちそう。頼りになるなあ。

「今です！」

言い終わらない内に、アタシは川に飛び込んだ。水がすごく冷たい。

デュークの足元が凍ってるように見える。あれ？ 動けない。アタシの周りも凍ってる。流されてる。

「デューク！ ひどいよ！ アタシだけ逃げるなんてやだよ！」

氷の向こうに声は届いたんだろうか。デュークがこっち見て笑ってたように見えたけど、気のせいかな。女なのに、こんなに強いヒトもいるんだ。アタシもデュークみたいに強くなれるかな？

「デューク。死んじゃだよ」

意識が薄れていくのがわかる。強く、ならなきゃ。

【H】情報を制して展開を支配する

三度目の狼煙を上げてから、一時間ほど。天気も良いからすぐに気付くはず。そろそろ……

「春名様。ご無事で何よりです」

「ありがとう。お陰で、うまくいった」

「しかし、ここまで予測通りとは、一体どのような方法を用いたのか気になります」

「言ったでしょ。私には自信があるの。誰にも負けなくらい、ね」
城に戻って他の隊の報告を聞いて、次の動きを考えなければなら
ない。

集めた情報は、やはり、役に立っていた。全員に接触ができたというのは大きい。

「詳細を報告してくれる？」

「では、まず私から。玄武国の姫及び護衛には、砦付近で接触。状況から見て、会議前です。襲撃部隊は全滅しました。敵の騎士二名が絶命、一名が軽傷、一名が無傷です。姫も無傷です」

「やっぱり、報告員を置いたのは正解ね。修一君が軽傷でアルバートが無傷というところかな」

「アルバートはいませんでした。無傷だった剣士がシュウと呼ばれていたの、修一という男と見て間違いないでしょう。春奈様の名にも反応を見せました。朱雀国に向かうようですよ」

「大体、予定通りね。ありがとう」

「では、次は私から。朱雀国の王及び護衛にも、砦付近の山道で接触。会議前でしょう。こちらにも襲撃部隊は全滅です。敵の王と近衛兵二名が絶命、同行していた女二名は逃してしまいました」

「その女性二人は、綾香とデューク？」

「確かに名を呼ばれていたもので、そう判断して良いと思います。デュークの方は間違いありません」

「会議中止と疑心暗鬼という目的は果たしたから問題ないんだけど、全滅したのはなぜ？」

「デュークが情報にない念術を用いました。落盤と崖崩れを受けたことで、ほぼ全滅です」

「不可能だと思っていたけど、そんなことができるヒトもいるんだ。わかった。ありがとう。私の方も成功した」

「よく接触できましたね。現れて間もなく城を出てしまったという情報しかなかったはずですが」

「城付近の町や村に情報は山ほどあった。それを辿ったらすぐに見つけられた」

「実力はいかがでした？」

「天才ね。精鋭部隊が四対一で全滅した上に、大した怪我もしていない」

「それほどの男が、よく話を受けましたね」

祐介は玄武国に向かっていて。いずれはアルバートとぶつかるはず。

「今後の話なんだけど、玄武国はしばらく待てば兵力が落ちる。それまでは手を出さないで。朱雀国の王がいなくなった混乱を突いて、使者を出して。降伏勧告か、同盟でも構わない。書状を手にしたら、そのまま白虎国に向かって、降伏勧告して」

「なるほど。それなら白虎国は確実に降りますね」

「念の為に、大軍を白虎国に向かわせておいて。使者が着く頃には間に合うように」

「それではここが手薄になってしまいますが」

「ここには誰も攻めて来ない。万が一来たら私が何とかする」

白虎国軍がいれば出陣した軍と鉢合わせるし、朱雀国は指揮系統が混乱するからこのタイミングでは動かない。玄武国軍は祐介が狙

つてる。仮に軍が出ていても、壊滅させられないにしろ十分な時間は稼げるはず。

「私は少し休ませてもらうから、あとはお願いね」

【Y】英雄の資質

「やっぱり、いないか。時間が経ち過ぎたんだよな。」

「こんなところにヒトが来るなんて珍しいな。何してるんだい？」

「手斧を片手に話しかけてくる髭だらけの男って。この世界じゃ普通なのか。」

「ちよつと探し物を、ね」

「何だ何だ。この川に落とすしちまつたら、諦めるしかないだろう。」

「何せ、国を跨いで一周しているんだからな。一周回って来るのを待つてみるかい。はっはっは」

「笑い事じゃないんだけどな。でも、このヒトの言う通りなら、確かにここで探しても無駄だな。」

「アンタ、きこりつてやつか？　ちよつと相談があるんだけどさ」

「そうだが、何だ？」

「この川を渡る筏みたいなもの作れないかな？」

「安全を保障しなくてもいいなら作れんこともないが、どこへ行くってんだい？」

「玄武国の城に行きたいんだけど」

「はっはっは。やめとけ。馬を走らせた方がよほど早いぞ」

「流れを見る限りじゃこっちの方が早そうだけどな」

「お前さん、世界の地理はわかってるか？」

「城で見た地図だと、大陸の北に玄武、東に青龍、南に朱雀、西に白虎で、俺がいるのが白虎国。」

「北東に行けば玄武国だろ？」

「そうだが、川は円を描くように左回りに流れているんだってことは……」

「玄武国に行くまでに朱雀国と青龍国を経由しなきゃなんないのか」

「そういうことだ。諦めて陸路を行け」

「わかったよ。情報ありがとう」

「待て待て。剣はボロボロだし防具が無いんじゃ戦えんだろう。とりあえずウチに來い」

「俺、結構急いでるんだけどな」

「剣を打ち直して、防具をやるってんだ。悪い話じゃないだろう」

「何でそこまで？」

「昨日面白い奴を見てな。誰かの心配をしながら、四人をあっという間に倒したんだ。そいつが敵国に行くとなれば、誰かの為に戦うんだろうよ。そういう奴は好きなんだ」

見られてたのか。俺のこと知ってたんじゃねえかよ。

「だったら最初から言ってくれよ。んじゃ、頼もうかな」

結構、色んなのがあるんだな。使い方がわからない武器もある。

とりあえず鎖帷子を貰った。

「しかし、何で一人なんだ？ 騎士でもないのに戦争に行くのか？」

「俺は救世主ってやつらしくてね」

きこりが吹き出したお茶が剣にかかった。熱ですぐに蒸発したけど、俺の剣になんてことするんだ。

「おいおい、柄にはかけないでくれよ」

「救世主ときたか。こいつはすごい拾い物だ。良かったら、武器も持って行っていいぞ」

「そりゃありがたい。俺、こういう剣が欲しかったんだよ」

俺の身長より少し丈がありそうな剣を取る。今までとは重みが違う。

「そんなの扱えるのか？ 大剣を実戦で使う奴なんて、世界一の剣士として有名なアルバートくらいしか聞いたことがないぞ」

「そりゃ奇遇だな。俺が戦いに行く相手もアルバートって言うんだ」

【S】運命の出会い

これで三度目だ。こんな頻度で盗賊に襲われるなんて、朱雀国の治安はどうなっているんだ。

「おい、聞いてんのか？ 金を持ってねえなら、剣と馬を置いて行け」

何だ、あれは？ 女の口を背負って歩いているようだが、今にも倒れそうだ。どう考えても町に辿り着くことはできないだろう。盗賊の餌食になるのは間違いない。

「おい。殺されない内に動けよ。みんな、気が短いからな」

周りを囲む盗賊達が笑う。六人か。相当な腕でもない限り大丈夫だろう。

「なあ、お前達の馬を二頭譲ってくれないか？ その分の金なら出す」

笑い声が一度止み、より大きくなってまた響く。やはり、話し合いは無駄か。鞘に納めたままの剣を握る。一呼吸置いたところで、馬を駆り、リーダー格のような男に一気に近付いて、叩き落とした。「俺は、金品も命も奪うつもりはない。馬を二頭譲って欲しいだけだ」

「調子に乗るなっ！」

盗賊の一人が馬と突進して来るが、騎士の馬術に比べれば大したことはない。軌道が丸解りだ。突き出してきた剣を払うと、その勢いで馬から転げ落ちた。

「この二頭を譲ってくれば、俺はそれでいい。まだ戦いたいと言うなら、次は剣を抜くぞ」

「コイツはやめだ！ 他を探すぞ！」

地面の男二人を拾い、盗賊達が逃げて行く。急がなければ。

背負われていた女の口は大丈夫そうだ。気を失っているだけだから、栄養さえ摂ればいずれ目を覚ますだろう。問題は背負っていた方だ。こんな傷だらけの状態で、人間を背負って歩くなんて、そうできない。気を失っているせい、念術がうまくいかない。傷薬を塗って様子を見るしかない。傷薬も念術の応用らしいから、効き目はそう期待できないだろう。

「うっ！ ぐ……」

「気がついたか？ しっかりしろ！」

「貴方は……？」

「とりあえずおとなしくしててくれ。もう一度念術を試すから」

今度は大丈夫みたいだな。少しずつ傷が癒えている。

「ありがとうございます……っ！」

「無理して喋らなくていいから。まずは元気になるのを優先しなよ」

「お陰で、大分楽になりましたから。念術に熟練されていますね」
「散々訓練したからな。しかし、大した精神力だな。まだ痛むだろうに。」

「ある程度動けるようになったら、近くの町に移動して宿を取ろう。馬は用意してある」

「このお礼は必ず。本当にありがとうございます」

「礼なんかいいよ。そんなことより、その胸の傷は深いのかな？」

「なぜです？」

「なぜって、なあ。やりにくい。」

「傷を治す為であっても、女性の胸に触れるのは気が引ける。治せる保障もないし、傷が浅いなら、信用できるヒトに治してもらってくれないかな」

「私は貴方を信じます。できれば、治して下さい」

言いながら、彼女は俺の手を胸元へ持っていった。

「同じ言葉を俺にくれたヒトを思い出したよ。全力で応えてみせる」

【A】真っ直ぐ

頭が痛い。内側から釘を刺されてるみたい。一定間隔で金槌で叩かれてる。

「痛いよっ！ やめてっつてば！」

飛び起きた。ここ、お城？ でもアタシの知ってる部屋じゃない。どこだろ？

「きゃあっ！？」

思わず悲鳴を上げそうになった。横を見たら知らないヒトがいた。随分、賑やかだな。元気そうで良かったよ

にっこり笑って、鎧の男のヒトが言う。でも、やっぱり、知らないヒトだ。

「布団、出るなよ。裸らしいから」

「っ！」

本当だ。何も着てない。慌てて布団に潜り込む。

「見てないよ。布団掴んだまま起きただろ。見えたのは背中だけだから安心しろ」

背中は見たんじゃない。何を安心するって言うの。

「おいおい、随分な疑いようだな。俺は何もしないって。その気があればとっくにやってるさ」

「ねえ、ここどこ？」

「城だよ。アンタは川岸で見つけたんだけど、あんなでかい川で泳ぐのは、もうやめとけよ」

「泳ぐ訳ないでしょ！ どの国のお城？」

「玄武国だよ。とりあえず、姫の侍女を呼んで来るから待ってる。目を覚ましたことも報告しなきゃならないし、着替えて飯を食え。話はそれからだ」

国外まで流されたの？ デューク無事かな。みんなは……

「そうだ！ ねえ、この国に救世主いるでしょ？ 会わせて！」

「今はいないぜ。とりあえず話は後だつて言つただろ」

「こんなに豪華な食事出されるなんて。アタシ、カントイされてるのかな。」

「ご無事で何よりです。お名前を伺つてもよろしいですか」

「お姫様だよ。初めて見た。綺麗なヒトだなあ。」

「アタシは綾香って言います」

「春奈という方をご存知ですか？」

「ハル！？もしかしてこの国にいるんですか？」

「やはりご存知でしたか。うなされるように、何度も呼んでいましたので」

「ハルは友達なんです。ずっと探してて……他にも、二人探してるんですけど」

「ユウスケと……シユウ、ですか？」

「知っているんですか？」

「貴方が呼んでいた名です。落ち着いたら、ゆっくり話しましょう。まずは体調を整えて下さいね」

「ありがとうございます」

「すごいよ。みんなに会えるかも知れない。他の国に行ったら危険だと思つてたけど、こんなによくしてもらつて、嬉しいな。」

「それだけ食べれば、すぐに元気になれるぜ」

「さっきの鎧のヒトが笑いながら言う。見張りかな？ 立つたまま、お茶だけ飲んでる。」

「せっかくカントイしてもらつてるんだから、甘えないとね」

「はっはっは。確かに歓待みたいな待遇だよな。姫に感謝しろよ」

「ヨトギもしてくれるの？」

「お茶が飛んだ。苦かったのかな。お姫様が顔を赤くして鎧のヒトを睨んでる。そりゃこんな立派な食卓に向かってお茶を吹き出した

ら怒るよね。

「アル……貴方は年頃の娘に何を……！」

「姫！ 誤解、誤解ですよ！ 俺は何も！」

知らないと。

【H】果てのその先

蒔いた種の目は出てるかな。順調に育っているといいんだけど。

「珍しいですね。考え事をしながら微笑まれるとは」

「褒め言葉として受け取っておくね」

「現在は春奈様が直接動かずとも良い時期なのでは？ ころころという時にゆっくりされてはいかがです」

確かに、報告を聞いて情報として纏める以外に必要なことはない。想定外の緊急事態にでもならない限りは、それぞれの専門家に任せとおけばいいんだけど、何かもつたいない。

「ねえ、海路つて使えないの？」

「何にですか？」

「もちろん、移動手段に」

「王族の旅行以外では使われませんよ。陸路と比べて利点がありませんし」

「ここからなら、白虎国へは海路の方が早いんじゃない？」

「珍しいですね。やはり、お休みになられた方が」

「どういう意味？ 私は真剣に言っているんだけど」

「しかし、どう考えても、比べるべくもない距離ですが」

「私が言っているのは、大陸沿いを回るのではなく、真っ直ぐ東へ行くということ」

「春奈様。白虎国は西です。どうか、ご無理をなさらずに」

「ここまで話が食い違ふということは、世界が丸くはないということかな。」

「ねえ、もしずっと海の彼方に向かって行ったらどうなるの？」

「奈落に落ちます。そこで世界が終わっていますから。その先には、空も大地も海もありません」

それが本当なら、素敵な情報。花を咲かせることに失敗したら、そこへ行こう。

【Y】価値観

やっと城が見えるところまで来たけど、どうしたもんな。正面から入ってもいいけど、アルバートは強いから、できれば万全で戦いたいな。

「傷薬つて置いてる？」

「はい。いかほどご入用ですか？」

町の道具屋つて露店みたいなのだと思ってたけど、かなりしっかりしてるんだな。今度武器屋とかも入ってみたいな。

「これで買えるだけ」

今までに手にした金を袋ごと出す。三つくらい買えれば助かるんだけど、相場がよくわからん。

「すぐにお持ち致します！」

展示してあるのでいいのに。っておいおい。箱が出てきたぞ。

「もしかして、それ全部？」

「いいえ、あと四箱お持ち致しますので、今しばらくお待ち下さい」
「どうなってるんだよ。傷薬つてこんなに出回ってるのか？ できるまでのことを考えると、むやみに使いたくないし、そもそもこんなに荷物ができたら困るからな。」

「あ、ごめん。三つでいい。釣りはいらさないから」

「しかし、そういう訳には……そうだ！ では、これをお持ち下さい」

シルバーのアクセサリか。デザインは結構いいな。

「幸運のお守りとして名高い首飾りです。販売品ではありませんが、お礼の気持ちです」

「ありがとうございます。じゃ、これ貰うよ」

「またお越し下さい！」

準備はこんなもんか。仲間とか作っとけば良かったかな。ゲームの勇者様みたいに、いつの間にか味方ができてるって訳にはいかな

かったな。まあ相手も魔王やドラゴンじゃない。人間なんだから、
何とかなるだろ。

「さて。ボス戦といきますか！」

【S】絡み合う意思

目的地が同じだというのはありがたい偶然だったな。あとはどう動くかだが……

「彼女が目を覚ましました。貴方も来て頂けますか」

「良かった。一安心だな」

俺が見つけてからだけでも丸三日は経っている。目覚めないかも知れないと思っていたが、本当に良かった。

隣室に入ると、ベッドに腰掛けている少女が顔を上げた。随分衰弱している。

「この方が私達の恩人です」

「君を助けたのは俺じゃないけど、目覚めて何よりだ」

「私にはルイという名があります。助けて頂いてありがとうございます」

「そういえば、まだ名も知りませんでしたね。私はデュークと申します。貴方は？」

このヒトに隠す必要はないか。信用できるだろう。デュークという名も有名だ。

「有名人だったんだな。城にすんなり入れたのが納得いったよ。俺は修一」

「まさか、シユウ君ですか？」

修一という名を聞いただけで、そんな呼び方が咄嗟に出るといふことは……アヤとつながりがあるのか。

「綾香という名を知ってるかな？」

「やはり！綾香様から聞いていますよ。ハルと祐介君も」

「祐介！？」

ルイは祐介とつながりがあるのか。一気に手がかりができたな。

「デュークさん、頼みがある。しばらくここに留まらせてもらつことはできないかな」

「歓迎しますよ。綾香様は和睦を望んでいますから。ただ、侵攻を受けた際の迎撃戦だけでも力を貸して頂けるとありがたいです」

「ありがとうございます。できることは力にならせてもらう」

「あの……私も騎士団に、見習いとして置いて頂けませんか」

「ルイさんは何も気に病まなくても、体調が戻るまでいて頂いて構いませんよ」

「いえ、剣士を目指したいんです」

「朱雀国では一般人からの志願も受け付けますが、騎士として認められるまでの訓練と雑用は非常に厳しいものですよ？」

「どの国でも同じか。下積みは過酷だった。意思があれば苦痛ではないが。」

「覚悟の上です。どうか、お願いします」

「わかりました。体調が整ったら、手続きをしましょう」

誰か来るな。鎧の音がするということは、城の兵士か。

「デューク様！」

入り口に近付いたデュークに何か耳打ちしている。何かあったのか？ 兵士がすぐに走って行ったところを見ると緊急ということか

「シユウ君。お願いがあります」

「デュークさんにそう呼ばれると、何か違和感があるな。で、俺にできることなら受けるけど」

「青龍国から使者が来たようです。私が交渉の席に着くので同席して下さい」

「構わないけど、外部の人間なんかより、城内の騎士の方がいいんじゃないかな？」

「ここへ来るまでに貴方の剣術は見ています。その腕を借りたいのです」

「来たのは外交の使者だろ？ 話は受けるけど、戦闘の可能性があるなら理由を聞いておきたい」

「実は、玄武国との会議に行く途中で襲撃を受けました」

偶然じゃないな。俺達を襲った奴と同じ手の者だろう。あの深手

はそのせいか。

「青龍国の隠密装束を着ていましたし、特産馬を駆っていたので、まず間違いありません」

「実は俺も会議前に襲撃を受けた。二国の仲違いを狙っているみたいだな」

朱雀国の名を出したのはその為だったのか。ということとは、ここに春奈さんはいないだろう。青龍国にいる可能性が高い。アヤと合流して青龍国へ行かなければ。

【A】戦う顔 護る眼差し

何か外が騒がしいな。見に行ったら怒られるかな。ただ寝てるのって暇なんだよね。ちよつとくらいなら大丈夫だよ、うん。見つからなければいいんだから。

「どこへ行くんだ」

「わあっ！」

振り返ると鎧のヒトがいた。最初の時もそうだったけど、このヒト気配を消す天才なんじゃないの？

「部屋に戻れ。ちよつと厄介なことになっているんだ。外に出たいなら、後にしてくれ」

「何があつたの？」

「大人の事情に首を突っ込むのはまだ早いぜ。部屋でおとなしくしててくれよ」

「子供扱いしないでよ。アタシだって」

正面にしゃがみ込んで、同じ高さでアタシを見据えるその瞳を、知ってる。いい加減な感じのこのヒトが、こんな顔をするのは初めて見る。それでも、アタシはその瞳を知ってる。

「さ、部屋に戻るんだ。俺はちよつと急いでるんだ」

それだけ言つて、立ち上がつて向こうへ歩き出す。少しずつ、離れて行く。行っちゃっう。

「あ、あ、待つて！」

顔だけがアタシを振り返る。

「アタシも行く！」

鎧のヒトがもう一度、アタシの前でしゃがんだ。さっきと違う瞳でアタシを見る。心の奥まで届きそうな視線が突き刺さる。

「理由を言つてみる」

「どっか……行っちゃっう気が、した」

アタシに微笑みかけてくれた王様。氷の中で見たデューク。みんな

な同じ瞳をしてたんだ。

「一緒に来い。俺はどこにも行かねえよ」

笑いながら、アタシの頭に軽く手を乗せてくれた。大きな手。すごく安心する。本当にどこにも行かないって思う。だけど、だから余計怖い。アタシを安心させてくれるヒトは、いなくなっちゃうから。

中庭へ出ると、たくさんの騎士が振り返った。人垣に道ができていく。その向こうに鎧を着てないヒトが一人いる。

「ここにいろ。俺はアイツに用事がある」

今度はアタシを見ないで、頭に手を乗せてくれた。何か言いたいの、声が出ない。

「無傷か。若いのに大したもんだ。最近の若いのは怖えなあ」

「アンタがアルバートか。会えて良かったよ」

この声、もしかして！

「祐介君っ！？」

「アヤちゃん？」

「何だよ、知り合いか？ お前の用事はあのコか？ だったら剣を納める。戦う必要はない」

「アヤちゃんも助けるけど、俺の用事は別件だ。剣を抜け」

「やる気満々だな。お前が本気なのはわかった。騎士として、この戦いを受けよう。一騎討ちだ」

二人が戦う？ 何で？ やめてよ。アルバートって有名な騎士なんだよね。すごく強いんでしょ。

「その前に、二つだけ質問に答える。正面から来た割に戦いの跡がほとんどないのはなぜだ」

「俺が用があるのはアンタだけだ。邪魔をしない限り、他の騎士と戦う理由がない」

「なるほど。お前とは初対面のはずだが、俺を狙う理由は何だ。名
声じゃないだろ？」

「自分の胸に訊いてみる。俺はアンタを救せねえだけだ」

「何か誤解してるな。全員、手を出すなよ！」

ああ、剣を構えてる。戦いになっちゃうよ。何で？ 二人とも、
いいヒトなのに。やだよ、こんなの。

【H】予測を超える予感

嫌な夢を見た。内容は思い出せない。でも、嫌な夢。こういう時は、何かが起こる。予測がはずれるかも知れないし、自分に何かあるかも知れない。他にも種を蒔いておいた方がいいかも。

身支度を終えて広間に行く頃には、隠密衆と執政官はもう集まっていた。

「急にごめんね。私、またしばらく留守にするから」

「我々が呼ばれたことでそれは予測致しましたが、一体どちらへ？」

「白虎国。国王に会いたい」

「降伏させた後に、ここへ出向かせれば良いのでは？」

「その降伏予定が崩れた場合に備えて、会いに行きたいの」

「しかし、春奈様の策略は見事です。穴があるとすれば玄武国への対応ですが、白虎国の降伏は揺るがないかと」

「私もそう思うけどね。女の勘、かな。予定通りになれば、帰って来るつもり」

「そういうものは当てにしない方だと思っておりましたが、ご指示とあればそう致しましょう」

私の目的が世界の統一なら、予感なんて当てにしないけど、ね。

「私はすぐに発つから、二人同行してもらえる？ 留守の間は、いつも通り任せるね」

「二人だけで良いのですか？ 危険が大きいのでは」

「今回は戦闘しに行くつもりじゃないから。賊に対する護衛と連絡員がいればいいの」

「くれぐれもお気をつけて」

「ありがと。それから、朱雀国との交渉に失敗した場合なんだけど、

白虎国に向かわせている部隊を全軍退却させて。あとは、私が戻ってから考える」「
「仰せの通りに」

【Y】最強の剣士

世界一、か。確かに、威圧感が半端じゃねえ。間合いに入ったら斬られる。隙がねえよ。

「どうした。来ないのか」

どう攻撃をイメージしてみても、当てられる気がしない。どうなっただよ。

「お前の覚悟はその程度か」

くそっ！ ハルちゃんがどんな思いをしたのか、わかってんのか！ こんな奴にビビってる訳にかねえんだよ！ 考えるんだ。戦い方を。何かあるはずだ。

「うわっ！」

何だ今の？ 気付いたら目の前に剣があつたぞ。一瞬でも反応遅れたら刺さってたぜ。この距離はまずい。今までの相手とは次元が違っ。

「よく反応したな。本気の攻撃を避けられるのは久しぶりだ」

待てよ。防戦になった方が危ねえ気がする。攻撃しながら隙を探した方がっ！

「ぐっっ！」

やっぱりな。剣を防御に使わせてやれば、攻撃の手数だつて減るんだ。

「つと、危ねえ。お前、できるな。名前何て言つたっけ？」

「俺は祐介だ。忘れられねえ名前にしてやる、よっ！」

くそっ、全部読まれてるな。どこから攻撃しても剣が待ってやがる。しまっ

「ぐうっ！」

脚をやられた！ 転がりながら傷薬を出し、瓶を割って傷口にかける。

「くそっ！」

追い討ちが速過ぎる。無駄な動きなんてしてなかったはずだ。転がってしゃがんだ態勢になった時には、もう剣を振り下ろすところだったぞ。何て奴だ。顔を上げてから飛び退いてたら、間違いなく斬られてた。影が見えて助かった。

「大したもんだ。歴戦の剣士でも、そんな動きはなかなかできん」

「アンタはやりそうだけどな」

「大剣を持ったままじゃ、自信がないな」

同じ武器のはずなのに、この差は何なんだよ　　そうだ！

「らあっ！」

思い切り大剣を振り、薙ぐ。

「そんな大振りんなっ!？」

大剣を放し、背中に手をやる。横で構えた大剣は間に合わねえぜ。俺の愛剣はこっちだよ。振り下ろして、俺の勝ちだ！

「う、そだろ……ぐあっ！」

腹を抉られたみたいな蹴りだ。けど、そんなこと問題じゃねえ。詰んだ。勝てねえよ。

「化けモンかよ、アンタ。くそおおおっ！」

「間一髪だった。俺もやられたかと思っただけどな。だが、お前の負けだ」

奴の足元に大剣が二本。その一本を拾いながら、俺の愛剣を後ろに放り投げた。もう、俺に武器はない。

白羽取りって、人間業じゃねえよ。完敗だ。ハルちゃん、ごめんな。

【S】糸口

部屋はそれなりに広い。戦闘になってもある程度の間合いは取れそうだ。

「お待ち致しました。私はデュークと申します。朱雀国の代表としてこの席に着かせて頂きます」

「ご高名は存じております。早速本題に入りたいのですが」

奥に二人。席に一人。窓の外に気配を感じるが、敵なのかかわからない。少なくとも、三人は敵か。

「私ども青龍国は貴国との同盟を望んでおります。受けて頂けませんか」

「お断り致します」

気配が変わった。デュークさんもストレートだな。女性なのに、大した度胸だ。

「貴国は和睦を望んでおられるのでしょうか。悪い話ではないと思いますが」

「その通りです。しかし、和睦の提案の為にこちらから出した使者は、現在消息不明です」

「帰途で賊に襲われたのかも知れません。ご冥福を祈ります」

「先日、確認の為に再度使者を出しました。貴国の返答によると、使者など来ていないそうですが」

「っ！」

交渉をしくじったな。余計なことを話すのは慢心のせいだ。策略がほぼ予定通りに運んでいたということか。実際、俺も罠にかけられてここにいる。糸を引いている人間は手強いが、配下にはそこまでの機知はないと見て良さそうだな。デュークさんの方が上だ。

「使者が着いていたならば、そのような返答はおかしいですし、着いていなかったのならば、和睦を望んでいることを知らないはずで。同盟の申し出を信用することはできません」

殺気が満ちた。動くか！

「ぐっ！？」

デュークさんは後ろに飛び退いている。俺が蹴り上げた長方形のテーブルに、敵の剣が突き刺さっている。呻き声を漏らした敵の脚には、俺の斬撃の跡がある。

「デュークさん！ そのまま部屋の外へ！」

敵の一人がデュークさんを追う。窓を割って一人飛び込んで来た。迷っている時間は無い。入り口に向かった敵に斬りかかる。その右腕に迫る剣が見える。

「シユウ君っ！」

「つつ！」

右手の剣を放し、そこに左手の剣を振り上げ、同時に後ろに迫る敵を蹴り飛ばす。俺の右腕を斬りつけた剣が折れ、切っ先が飛ぶ。後ろの敵が倒れ込みながら脚を斬りつけてくる。

「だあっ！」

蹴り足の勢いに乗って振り向きながら、左手の剣を投げ付ける。

右手で使っていた剣を左手で掴み、構え直す。俺の右腕を斬った敵も構え直している。テーブルに刺さった剣を抜いた敵が、間合いぎりぎりの位置に詰め寄って来た。あと二人、か。

「貴様、何をした？ 斬り口が燃え上がるなど、あり得ぬ！」

「余計なことを考えていると、今度はお前がそうなるぞ」

俺の脇腹を掠めて、火矢が敵を貫く。正確に急所を射抜いている。入り口の外から、間に俺を挟んでいるというのに、凄まじい腕だ。遠くで怒号が飛んでいる。城の兵士が状況に気付いたな。

「もう、打つ手はないぞ。諦める」

残った敵に詰め寄ると、一瞬の間を置いて、口から血を漏らしながら倒れ込んだ。

「自害されましたか。情報が欲しかったのですが」

「俺達が死なずに済んだだけでも、良かったよ」

「シユウ君のお陰です。ありがとうございました」

何回聞いても違和感があるな。さつきも戦闘中にアヤを思い出した。

「そつだ、状況が変わったから、青龍国に向かおうと思ってる。できればアヤを連れて行きたいから、話がしたい。ここが落ち着いたら、アヤのところに案内してもらえないかな」

「綾香様は……いません」

【A】踏み込めない世界

すごい。すご過ぎて、動けなかった。何も言えなかった。二人のどっちが傷付いても嫌なのに、止められなかった。けど。もう、勝負はついた。終わったんだ。

「ね、ねえ！ もう、いいよね！ もう、終わりでしょ？」

「アヤちゃん、ごめん。負けちゃったわ。このヒト強えよ」

「ねえ！ アルバートさん！ やめて！ もう、祐介君も負けを認めてるじゃない！」

「おい。俺が悪者みたいな言い方をするな。殺したりしないって」
良かった。二人とも、どこへも行かないんだね。戦ってる時はそんな風に見えなかったんだもん。怖かったんだよ、本当に。

「祐介。お前が俺を狙った理由はわかった。だが、それは誤解だ。中で話してやるから来い」

「何言ってるんだよ、急に！」

「他の奴に聞かれたくない話だろう。ごちゃごちゃ言わずに来い」

「やっぱりてめえがっ！」

「落ち着けよ。負けたんだから、話くらい聞け。納得できなかったら、もう一度戦ってやる」

「くそっ！」

そういえば、祐介君があんなに怒ってるの、初めて見た。何があったんだろう。

「ねえ、アタシも聞きたい」

「大人の事情に首を突っ込むのは早いつて言っただろ。部屋に戻れ」

「ごめん、アヤちゃん。これは聞かせたくないわ」

「祐介君まで！ アタシ子供じゃないよ」

「そういうことじゃないんだ。頼む、アヤちゃん」

聞かれたくない話、か。祐介君は自分のことは隠さないから、誰かの為に隠してるんだよね。

「わかった。でも、お願いだから、もう戦わないで。祐介君がそんなに怒るようなことを、アルバートさんはしれないと思う」

アルバートさんの瞳を見る。

「もし、してたら、アタシ赦さないからね」

「安心しろ。俺は恥じるような生き方はしてねえよ」

やっぱり、嘘ついてるようには見えない。ちゃんと二人とも納得できるといいな。

「祐介君。カッコ良かったよ。アタシ、普通の大きさの剣も振るのがやっとなんだよね」

「ははっ。勝ってたら、な。同じ武器使って負けたんだ。言い訳もできねえって」

「冗談じゃねえぜ。お前の歳でそこまで強い奴なんか見たことねえよ」

「アンタに言われても信じられねえよ。それより、早く納得のいく説明をしてくれ」

祐介君の表情がちょっと柔らかくなった気がする。

「じゃ、行くか。アヤちゃん、部屋に戻ってるよ」

「アヤちゃんって言わないでよ。何か、変」

「何だよ、祐介はそう呼んでたじゃねえか。もしかして、お前ら、恋人同士か」

「「違っっ!」「」」

「はっはっは。まだ二人ともガキだな。ちゃんと部屋にいるよ、綾香ちゃん」

名前、覚えてたんだ。食事の時にお姫様に言ったただけなのに。

「祐介君との話が済んだら、救世主の話だからね」

「わかってるよ。じゃ、後でな」

【H】孤独なのだから

白虎国に入つて四日。城に着くまでの流れは予定通り。途中で青龍国軍を追い抜いた時には、まだ退却していなかった。後は報告待ちだけど……来た。

「ただいま戻りました。朱雀国との交渉は失敗したようです。更に交渉に当たった隠密衆が全滅しました」

動いておいて正解だった。うまくいつている時ほど、大きな落とし穴にかかり易い。

「それじゃ、私は白虎国王と会つて来るから。用事が済んだらすぐに帰るから、近くで待機してて」

「本当にお一人で行かれるのですか？」

「当然よ。せつかく一般人に謁見の機会を与えてくれているんだから。わざわざ警戒させる必要はないでしょ」

「無茶はなされませぬよう」

「行つて来るね」

城の造りはどこも似たようなものなのかな。こんなに普通に入れて、この国は大丈夫なのかしら。

「王様に謁見したいのですが」

「王はこの先におられる。失礼のないようにな」

何も調べたりしないんだ。簡単に暗殺されるんじゃないの？

「よく来たな。ゆっくりして行くが良い」

「お目にかかることができ、光栄です。僭越ながら、お願いがあつて参りました」

「申してみよ。広く民の言葉に耳を傾けるのも、王の務めだ」

「ありがたき幸せにございます。では、その」

少し俯き、間を置く。

「握手をして頂けないでしょうか」

「顔を上げよ、娘」

玉座から腰を上げた。こういう王もいるんだ。

「そのようなことの為に、わざわざ城までご苦労であった。これからも国の為に尽くしてくれ」

言いながら歩いて来て、私の手を取る。こういう王が民には好かれるのかも知れないけど、国のトップだと考えたら不安。私はこの国の人間じゃないんだけど、ね。

「む？　ぐう、う、くっ」

成功したかな。少し頭が重い。王の手を振り払い走る。

「貴様、無礼だぞ！」

兵士の怒号が聞こえるけど、振り返っている余裕はない。そのまま外まで走り抜けた。

「春奈様！　こちらです！」

理想の動き。優秀な駒で良かった。走る勢いを利用して馬に飛び乗る。

「一体何をなされたのです？　随分急いでおられるようですが」

「王に謁見しただけ。そう言ってあつたでしょ」

「春名様のお考えは、想像もつきません」

そう。今まで、私の考えていることを本当にわかったヒトなんて一人もいない。

「それでいいの。私のことは私だけがわかっていれば、ね」

【Y】それは偽りなのか

戦闘中は、間違いなく本気だった。殺気も感じた。

「ここが俺の部屋だ。入れ。誰も来ないから安心しろ」

視線で示された椅子に座る。アルバートはベッドに腰掛けている。

「俺はアンタを殺そうとした。アンタも本気だったはずだ。何で止めを刺さない？」

「本気の剣だからこそ伝わった、って言ったらわかるか？」

「わかる訳ねえだろ。どういうことだよ」

「お前の剣をこの手で受けた時、お前の記憶の一部を受け取った」

「何？ そんなことできるのかよ？」

「できねえだろ、普通は。偶然だ。それだけお前の想いが強かったんだ」

「俺の記憶が何か関係あるのか？」

「お前はハルという女の為に、俺と戦いに来た。理由は、俺がその女を襲ったから、だな？」

「やっぱりわかってんじゃねえかよ！」

「落ち着けて。記憶を受け取ったと言っただろう。お前は、その女に騙されたんだ」

「そんな訳ねえだろ！ ハルちゃんは本気で泣いていた。俺にはわかる」

必死で俺にしがみついて、震えながら、泣いてたんだ。一晩中、俺を離さなかった。

「それについては心当たりがあるが、その前に、誤解を解いてやる。俺は、この一月くらいの間は玄武国から出ていない。城の人間ならみんな知ってるぜ。俺が白虎国にいたはずがないんだ」

「城の奴ならアンタを庇っても不思議じゃない」

「意外に固いな、お前。シユウみたいな奴だぜ」

「シユウを知ってるのか！？」

「ん？ シュウも知り合いか。待てよ。もしかして、お前、他の世界から来たのか？」

「らしいぜ。救世主なんだってさ」

「そいつは助かった。シュウなら信用できるだろ。シュウも俺が国内にいたことを知ってるんだ」

それが本当なら、ハルちゃんが嘘をついたことになる。だとしたら、何で……くそっ！

「まだアンタを信じた訳じゃないけど、さっき言ってた心当たりってのは何だ？」

「俺も昔、女に騙されたことがあるんだ。今のお前みたいになつたよ。後で聞いたことだが、念術だったんだとき。念術の才能と完全な自信があると、相手にそのイメージを与えて、自分を信じ込ませることができるとらしい。嘘臭くて俺は信じてねえけどな」

「じゃあ何で俺に言うんだよ」

「同じなんじゃねえかと思つてな。俺はその女と一晩共にして、護つてやれるのは俺しかいない、なんて思つた訳だ。惚れてたんだよ。だから、念術とかそういうのは関係ない気がするんだよ。今思えば俺も若かつたんだろっつが、女は難しいわ」

同じだよ。マジかよ。誰にでもする訳ねえだろ？ あんな顔見せられたら、俺が特別なんだと思うだろ？ くそっ、わかんなくなつてきた。

「アンタ騙されたつて言つたな。どうなつたんだ？」

「その女は、家族を人質に青龍国の騎士に結婚を迫られてるつて言つてきた。俺は赦せなくて、その女の家族を取り戻す為に城へ乗り込んで、決闘の末にその騎士を殺した。有名な騎士だったから、俺の名前は広まり、玄武国では勇者扱いされたよ」

「騙されてるところか、いい話なんじゃねえのか」

「その騎士は家族を人質になんて取つていなかったし、求婚どころか、その女と会つたこともなかったんだよ。俺は今でも後悔している。お前をそんな風にさせたくない」

ほとんど同じじゃねえかよ。アルバートの言う通りなら、俺は救われたことになる。くそっ！ ハルちゃん、わかんねえよ。あの涙は、言葉は、嘘なのか？ 俺は騙されたとは思えねえよ。

【S】本当の優しさ

和睦の発案者がアヤで、しかも会議に同行を申し出ていたなんて、そんなことは想像もしていなかった。昔は自分から何かするようなことはなかった。誰かに頼って、甘えて、できないことがあると運命だからって諦めていた。ずっと知っているような気でいたが、変わっていたんだな。

「それなら、生きている可能性はあるな」

「はい。護ると約束したのに、合わせる顔がありません」

「襲撃者の手から逃がしたんだ。デュークさんは立派に護っただろ」

アヤは心配だが、今は居場所がほぼ確定している春奈さんが先だ。

「じゃあ、悪いけど俺は発つよ」

「私も行きます」

何か思惑があるのか？ 国の要職にいる人間が留守にするのは良くないと思うが……。

「青龍国に何か目的があるのか？」

「シユウ君と一緒にいたいからです」

「何だつて？」

「私は男性に護られたのは初めてで、シユウ君といるととても安心します」

「俺がデュークさんを見つけたのは偶然だよ」

「それでも、私の傷を気遣って、城まで護ってくれました。昨日も、青龍国の者から護ってくれました。私は、優しいシユウ君が好きです」

にこにこしながら、はつきりと言う。本気で言っているのは見ればわかる。嬉しいが、甘える訳にはいかない。

「俺は……自分のいた世界に帰る。だから、デュークさんの気持ちに応えることはない」

「構いません。私がシユウ君のことが好きだから、一緒にいたいん

です。シユウ君が迷惑でなければ、一緒に行かせて下さい」

迷惑なはずがない。デュークさんがいてくれれば、俺が助かることだってたくさんある。けど、一緒にいる時間が増えるほど、俺の気持ち揺らいでしまう。デュークさんに惹かれずにいられる自信がない。

「俺は、弱い。一緒にいたら、傷付けるかも知れない。いずれこの世界からいなくなるのに、デュークさんの気持ちを利用するかも知れない」

「私は、そんな優しいシユウ君が好きです」

笑顔のまま、はつきりと言う。

俺は、わかつている。本当にデュークさんのことを考えているなら、迷惑だと言えば済む。それを言えないのは、もう、デュークさんの気持ちを利用してあるんだ。

「私からは、行くのをやめるとは言いません。本当に迷惑なら、ちやんと行って下さい」

デュークさんは言うてくれているんだ。たとえ利用されたのだとしても一緒にいたい。俺の弱さをわかった上で、それでも、俺のことを……。

「一緒に、来てくれ」

「はい。よろしく願います」

俺は、弱い。

【A】集束する意思

気になるなあ。無理やりついでに行けば良かったかな。どんなことを話してるんだろ。

「ちゃんと部屋にいたか」

「アルバートさん。あ、祐介君も一緒なんだ。話は済んだの？」

「おう。誤解は解けた」

「いや、それはまだわかんないけど」

「祐介。頭の固い男は嫌われるぜ」

「アタシはチャラチャラしたヒトの方が嫌い」

「綾香ちゃん。空気を読めよ」

「ねえ、アタシの話は？」

「それも含めて、これからのことを話しに来た」

「そっか。アタシもいつまでもここにはいられないもんね。」

「救世主の話だが、シユウは今出かけてるんだ」

「変な話だよな。俺は白虎国で、ハルちゃんは青龍国って言ったから、てつきりみんなバラバラだと思ってたのに。シユウとアヤちゃんは一緒かよ」

「んーん。アタシは最初、朱雀国にいたんだよ。祐介君、ハルと会ったんだ？」

「ん、ああ、ちょっとだけな。アヤちゃんは、朱雀国からこんなところまで何で？」

「泳いで溺れたみたいだぜ」

「違うでしょ！ この国との会議に行く途中で襲われたの。それでアタシはみんなに護ってもらって、川に逃がしてもらって助かったの」

「何だと？ 随分タイミングが良いな。こっちの部隊も会議に行く途中で襲われたらしい。糸を引いてる奴がいそうだな。綾香ちゃん、敵の特徴とか、何か覚えてないか？」

「もしかして、襲われた部隊にシユウ君がいたんじゃない？」

「安心しろ。アイツは強い。ちゃんと敵を返り討ちにして、自分の用事で出かけたんだとよ」

良かった。生きてるんだ。シユウ君も祐介君も、いきなり来た世界で戦えるなんてすごいよ。

「で、どうなんだ？ 綾香ちゃんを襲った敵の特徴を何か覚えてないか？」

「服も馬も真つ黒で怖かったってくらいしかわかんないよ」

「そっぴや、俺を襲った奴にも真つ黒な服を着た忍者みたいなのがいたな」

「あ、そうそう！ 忍者みたいだったよ」

「青龍国の特殊部隊に隠密衆ってのがいるが、それっぽいな。黒毛の馬も青龍国の特産馬だ」

青龍国に行けば、デュークの手がかりがあるかな？ ハルもいるんだよね。

「ねえ、青龍国に行きたいんだけど、祐介君、一緒に行ってくれないかな。みんなで帰りたいから、せっかく会えたのに離れちゃうのは心細くて」

「俺は元々ハルちゃんに会いに行くつもりだったから、いいよ、一緒にいこう」

「俺も行くぜ」

「何でだよ。大体、騎士団はいいのかよ？ アンタ、団長じゃないのか？」

「戦争を終わらせる鍵があるかも知れん。それと、個人的に用事がある。まあ、無理に同行しなくても構わんぞ。俺は一人でも問題ない」

「いいじゃない、一緒に来てよ。こんなに強いヒトが二人もいてくれたら、アタシ、心強いよ」

【H】 開花の時

私の芽はどうなっているかな。すくすく育って、そろそろ花が咲いてくれるといいんだけど。

「春奈様。名指しでお客人です」

「ふふ。誰が来てくれたの？」

「朱雀国のデュークと、玄武国の修一と名乗っております」

「敵意を見せなかつたら、手を出さないでね。お客様だから。ふふ」

伏兵の気配を感じない。本当に二人だけで来たんだ。戦うつもりじゃないのかな。

「やっと会えたよ、春奈さん」

「伺いたいことがあります。この国で指揮を執っているのは貴方ですか？」

デュークの方は、少し怒りが滲んでいるみたい。

「そうだけど、何を確認したいの？ 刺客を放ったのは、私」

「潔いですね。貴方のやり方について、何か申し開きはありますか？」

「ないかな。私は、自分に必要なことをしただけ。綺麗事が必要な」

「いの」

「春奈さん。俺達は、戦争を終わらせに来たんだ。力を貸してくれ」

「力を貸すって、どうやって？ 私達は敵でしょ？」

「違う国にいただけで、敵じゃないだろ。それに、多分、他の国と戦う必要はない」

「流石ね。修一君はそういう発想ができるから、好きなの」

「同感です」

こんなところにも芽が。育てておいて損はない。

「茶化さないでくれ。四人で無事に帰りたいんだ。知っていることを教えてくれ」

「わかった。でも、ちゃんと話すには時間が必要なの。二人とも長旅で疲れてるだろうし、明日ゆっくり話そう。部屋は用意するから、今日は休んで行って。部屋は別で良い？」

「私は同じ部屋でも構いません」

「そういう訳にはいかないだろ。空きがあるなら二部屋欲しい」

「ふふ。仲が良いね。それじゃ、二部屋用意するから、使うかどうかは二人で決めてね」

結局、同じ部屋にはしなかったんだ。硬派なところが女の口に入気みたいだけどね。

「誰だ」

「私。ちよっと、二人で話したくて」

「春奈さんか。どうぞ」

修一がベッドから起き上がり、暖炉へ向かう。

「あ、明かりは点けないで。お願い」

一瞬、間が空く。

「わかった」

修一は奥の窓の方を向いて、ベッドの端に座り直した。私はその背中に右肩を寄せるようにして、腰を下ろす。視線は直角で、お互いの顔は見えない。

「星、綺麗だね」

「同じだな。俺達のいた世界と」

「ねえ、私の目的わかる？」

「わからないよ。もしかしたら、っていうのはあるけど」

「聞かせて」

「確信がないから、駄目だ」

「そついつところ、好き」

部屋が静寂に包まれる。月明かりだけが、私達を照らしている。

【Y】通じるもの

戦った時は余裕がなくて気付かなかったけど、改めて見ると、恐ろしく強いな。

「なあ、アルバート。どうやったらそんなにうまく扱えるのか、教えてくれよ」

「ん？ 大剣か？ お前、もう十分扱えてるだろうが」

「アンタみたいにはできないんだよ。何かコツがあるだろ。教えてくれよ」

「そんなこと言ってもなあ。俺はあまり考えてないからな」

「そんなんで、何でそんなに強いんだよ」

「俺もよくわからんが、何となく、敵の動きがわかるからそれに合わせてるだけだ」

「アルバートさんも天才なんだね。祐介君、ライバル出現だよ」

さっきの盗賊みたいな連中相手なら、俺も何となくわかるんだよな。だけど、強い奴相手に通用しないなら使えない。

「振ったり突いたりするのが速いのはどうやってるんだ？」

「まあ、俺とお前じゃ筋力も違うからな。技量で言うなら、踏み込んだ足で腰を、腰で腕を、腕で剣を、順に引つ張れ。意識しても簡単にできるもんじゃないだろうが、振るのは確実に速くなる」

そんなの自然にやってたと思うけどな。

こんな感じでいいのか？

「わっ！ アルバートさんみたい！ 結構簡単にできるんだね」

「そんな訳ねえだろ。どうなってんだよ、コイツは。俺はそれができるまでに二年かかったんだぜ」

「へえ。教わると違うもんだな。他には何かないの？」

「あまり欲張るな。ちゃんと身につけなければ使えない。今の斬撃だって、速度は上がっても軌道を読まれ易くなるんだぞ。一瞬一瞬の判断で使い分けて、初めて活きるんだ。大体な、お前はまだ剣を

握ってから日が浅いだろう。十年近い経験がある俺と比べるんじゃないよ」

「そういうもんか。そうだ、ドラゴンと戦ったことある？」

「何年か前に一度だけな」

「アンタ、すごいな。どうやって倒したんだ？」

「倒せる訳ないだろうが。小さな傷をいくつか与えたくらいだ。逆に、殺されかけた」

あの時に挑まなかったのは正解だった。その後ルイを助けてやることはできなかつたけど、きつとアヤちゃんみたいにな、どこかで無事であるよな。

「何か、いいな。アタシもそういう話に混ざりたい」

「アヤちゃんは、まず、剣を振れるようにならないとな」

「すごい念術とか使えればいいのにな。アタシ、そっちの方が似合いますよ」

「「そうか？」」

「何で二人して言うのよ。ひどいなあ」

「まあ俺もヒトのことは言えないな。使えないし」

「祐介もか！俺も使えないんだよ。原理を聞いてもいまいちよくわからなくてな」

「アタシもちよつとだけ。使えるヒトってすごいよね」

シユウとかハルちゃんは普通に使いそうだな。何か、頭の良さそうな奴は使えるみたいで、ちよつと腹立つな。まあ、得意不得意は誰でもある。俺もそのうちできるようになるだろ。

【S】本心

静寂が部屋を支配している。音の無い音が耳を刺す。闇に満ちた部屋に、月明かりが窓を映し出す。

春奈さんが背中に寄りかかっている。俺の気持ちは、やはりここにあったんだな。

「修一君……」

俺の方を向いた気配がする。首の裏に額を当てているんだろう。春奈さんの髪が首筋を撫^{なぐさ}る。さらつとしていて、少し冷たい。

しばらくそうして、春奈さんは離れた。後ろで立ち上がったのがわかる。何かが床に落ちた音がした。俺が言葉を出すより早く、俺の首に腕が回る。首の後ろには、素肌の感触がある。春奈さんが耳元で囁く。

「ねえ、こつち向いて」

これは春奈さんの本心じゃない。自分の身体も道具にしているのか。

「服を、着てくれ」

「抱きしめて、安心させて」

腕に力を加えながら、また春奈さんは囁く。聞いているのが辛い。

「嘘を、つくな」

「嘘じゃないよ」

俺の胸元にある春奈さんの手が、服を掴む。俺はその手首を掴んだ。

「自分の気持ちに、嘘をつくな」

「いじわるしないで……お願い」

囁く声が震えている。俺は手首を握る力を抜いた。

「春奈さんは、道具じゃない。他のヒトも、道具じゃない」

口にした瞬間、後ろに引き倒された。ベッドに押さえつけるように、春奈さんが俺に覆いかぶさる。その時にはもう、目の前に吸い

込まれそうな瞳があった。

「どうして……?」

鼻は触れ合ったまま。唇と唇との間には俺の手がある。俺の顔に雫が落ちる。二人とも動くことはなく、ただ、雫が落ち続けている。「服を、着てくれ。話がしたいんだ」

【A】瞳に映すもの

もうすぐ、青龍国のお城に着く。無事に来られたのは、やっぱり、二人のお陰。一緒に来てくれて良かった。

「今夜はこの辺りで休もう。明日には到着するはずだ」

「アルバートさん、一緒に来てくれてありがとう」

「何だ、急に。俺も退屈しないで済んだし、お互い様だろ」

「うん。祐介君にも言ってくる」

「あいつ、あんなところで何してるんだ？」

少し斜面が上がったところで向こうを見てる。何が見えるんだろ？

「祐介君。何見てるの？」

言いながら、後ろから肩を叩く。

「ああ、アヤちゃんか。脅かすなよ」

「驚いてないじゃない。もう」

「何やってんだ？ 夕焼けでも眺めてんのか？」

アルバートさんも来た。祐介君の見てる方は見たけど、アタシには夕焼けしか見えない。

「あれは……煙か。よく見つけたな」

「あれ、狼煙じゃないよな？」

「狼煙なら、もう少し規則や色を工夫するだろうな。おそらく、炊煙だ」

「ってことは、軍が動いてるのか？」

軍隊？ 朱雀国は侵攻やめたはずだし、玄武国も騎士団長のアルバートさんがここにいるんだから、国外まで出兵したりしないよね。白虎国か青龍国の軍になるのかな。

「可能性はある。白虎国軍の可能性が高いが、妙だな」

「青龍国を落として来たんじゃないのか？」

「白虎国王は内政に力を入れているから、軍の規模が小さい。基本的に自衛の為の軍で、滅多に国外に兵は出さない。お前みたいな腕

のある奴を支援して、少数精鋭の遊撃部隊を使っているはずだ」

「アタシ、難しいことはよくわかんないけど、青龍国の軍つてことは無いの？」

「無いとは言えないが、この時期に動く利点がない。和睦を封じて、疑心暗鬼を狙ってきたくらいだから、外交を駆使したり、弱った国を狙おうとするはずだ。狙うとしたら朱雀国だろうが、方角が合わない。今の俺達から見える位置は通らないからな」

「もし、白虎国軍だったら、青龍国が攻められちゃうの？」

「アヤちゃん。俺、先に行ってもいいかな？」

「行くなら、みんなで行こうよ。祐介君だけで行ったら、軍隊に一人で突っ込んだりするでしょ」

「やりそうだな。祐介、落ち着け。あれが軍だとしても、俺達より先に着くことはない。大軍つてのは移動が大変なんだ。絶対に間に合う。今夜はちゃんと休んで、明日城に着いてから考える」

すごいな、アルバートさん。頼りになる。でも、きっと若い頃は祐介君みたいだったんだろうな。何か、そう考えると可愛いな。祐介君はアルバートさんみたいになるのかなあ。

【H】独りじゃない

どうして？ 祐介の時と同じように、全部、使ったのに。

「ねえ、私のこと、嫌い？」

「春奈さん、頼む。服を着てくれ。このままじゃ、ちゃんと向き合えない」

ゆっくりと、身体を起こす。修一が瞳を閉じる。私の身体を視ないように？ そのままベッドを降り、床に落とした下着を拾う。部屋に入る前と同じ格好に戻り、もう一度声をかける。

「修一君。私を見て。私を信じて」

修一が起き上がって私を見た。

「俺は、ずっと見てるし、ずっと信じてる」

「修一君は変わらないんだね。何でなのかな」

黙って私を見たまま、微笑む。

「ねえ、私の目的、わかる？」

「今は、わかるよ。でも、本心じゃないだろ」

「修一君も、祐介君も、綾香も、私が襲わせたんだよ。祐介君を利用して、修一君も同じように利用しようとしたの」

「祐介にも、したのか」

「今頃は気付いて、私に会いに来てるかも知れない」

「なあ、独りになろうとするなよ。どれだけ何を壊したとしても、

俺は春奈さんを殺さない」

「私は、それを待っているのに。どうして？」

「本当は違う。俺も同じだから、わかる。何で生きてるのかわからなくて、生きるのが大変で、死んでしまいたいと思ってた。でも、本当は、生きている理由が欲しかったんだ。春奈さんも、そう。本当に自分を必要としてくれるヒトを探してる。そんな自分が嫌で、わざと恨みを買っようなことをして、自分を殺してもらおうと思っ
ていた」

「やめて!」

言葉を遮るように、修一に抱きつく。

「俺に、念術は通じない」

白虎国王と同じように、私を憎むイメージを与えていく。

「どうして……私を想うことも、憎むことも、どうして貴方はしてくれないの!」

「俺は、自分以外に完全に信じられるヒトはいない。自分を一番信
用し、信頼し、自分が一番の理想であろうと努力し、そんな自分が
一番憎い。同じなんだ」

修一の腕が、背中に回ってくる。優しく、そっと、包んでくれる。
「言っただろ。ずっと見てるし、ずっと信じてる。最初から、念術
なんかいららないんだ」

涙が溢れてくる。ずっと、独りだと思ってた。

「好きなんだ。春奈、一緒に帰ろう」

【Y】特別な「ごめんね」

随分あっさり通してくれたな。アルバートの言う通りなら、警戒されていてもおかしくないのに。それに、俺だけ別室に通されたってことは、多分、目的もわかってるんだよな。

「お待たせ」

ハルちゃんが来た。どう切り出せばいいんだ。くそっ、わかんねえよ。

「ハルちゃん。あの、さ」

「祐介君、ごめんね」

「何の話……って聞くまでもねえか」

「でも、ありがとう。本気で心配してくれて、本気で怒ってくれて」「ハルちゃん、ちょっと変わったか？ いい顔するようになったじやんよ。俺のしたことも無駄じゃなかったなら、いいよ、もう」

こんな風に笑うハルちゃんを見るのは初めてだ。今までは、何か、作り物みたいだったからな。

「あの、さ。変なこと聞くけど、えっと……」

「何？」

「その、どこまでが嘘なのかと思って、さ」

「……全部、かな。ひどいよね。本当に、ごめんね」

この顔も本物だ。本気で言ってるのが伝わって来る。くそっ。あの時より可愛いじゃねえかよ。やっぱり、俺が特別な訳じゃなかったってことか。

「本当は襲われてないんだよな？ 良かったよ。俺の用事はそれだけ。みんなのところに行こうぜ」

「……ありがとう」

【S】 開花の兆し

祐介と春奈が会っている。万が一に備えて俺も一緒にと言ったが、ちゃんと話したいからって春奈が自分から言ったんだ。きっと大丈夫だ。

「アルさん、お久しぶりです」

「よう、シュウ。何か吹っ切ったような顔してるな。しばらく会わない内に何かあったか」

相変わらず、恐ろしい観察眼だ。隠すようなことじゃないが、わざわざ言つようなことでもない。

「綾香様、ご無事で何よりです」

「デュークう。良かった。心配したんだよ」

アヤも元氣そうだな。祐介の顔はまだ見ていないが、みんな無事で良かった。

「シュウ、ハルって女はどうした？」

「春奈は祐介と話してます」

「あれ？ シュウ君がハルのこと呼び捨てにしてる」

しまった！ 余計なところに気付いてくれた。いつも抜けている割に変なところで聡いな、アヤは。

「ほう。何だ、お前とイイ仲なのか。姫というものがありながら、とんでもない奴だな」

わざわざ、余計ややこしくするから困るんだ、このヒトは。

「シュウ君、こういふのだからしない男は嫌われるよ。ねえ、デューク」

「私はシュウ君好きです」

「おうおう、シュウ、どうするんだ。大人気じゃねえか」

何か言つと、余計ややこしいことになりそうだ。もう、黙っておこう。

「シュウ君は昔から、人気あったもんね。一部で暗いって言われて

たくらいで、ほとんどのコがクールでカッコイイって言った」

「綾香ちゃんはどう思ってた？」

本人目の前にして、にやにやしなから聞くとは。完全に楽しんでいるな。

「アタシは、シウ君好きだけど、お兄ちゃんみたいなのがなあ。小さい頃から近くにいたから、ときめいたりはしないよ」

「アヤは何で真剣に答えるんだ。そもそも、アルさんは何しに来たんだ？」

「アルさん。青龍国へは何の目的で？」

「ああ、ハルって女を見に来たんだ。俺は赦せない部分があった場合によつては、死んでもらう」

「アルさん！ 本気ですか？」

「何も変わってなければ、な。そのまま野放しにはできん。まあ、会ってみてからだ」

その時は、アルさんと戦うのか。春奈は、絶対に護る。

「大丈夫。アルバートさんはそんなことしない。ハルはヒトから恨みを買うようなコじゃないよ」

「俺も、そうなることを祈ってるぜ。お。来たんじゃねえか」

部屋の入り口に目をやると、祐介と春奈が入ってくるどころだった。

【A】全員が同じ方を向いて

祐介君もハルも、すっかりした顔してる。モヤモヤは取れたんだね。良かった。

「アンタがハルか。少し聞きたいことがある」

空気が重くなった。アルバートさんから圧力を感じる。ちょっとだけ、怖い。

「嘘はつくな。嘘だと判断したら、斬る」

誰も、何も言えない。それだけ、アルバートさんの圧力がすごいんだ。

「今、幸せだと思うか？」

ハルが少し悩んでる。初めて見る表情。いつも自信満々で、悩むことなんてなかったのに。

「うん。幸せ」

「信じられる奴はいるか？」

「うん」

今度は迷わなかった。でも、アルバートさんが動かないってことは、ちゃんと答えてるんだ。

「そいつの為に、命を懸けられるか？」

「う、ん……待って」

すごく悩んでるように見える。

息が詰まる。圧力は緩まない。全員が縛り付けられたように、瞬きすら許されない空間にいる。

「私は……そのヒトの為に命を懸けられるのは嬉しい。けど、それでそのヒトと離れることになるのは、怖い。逆の立場で、私の為にそのヒトがいなくなったら、私はきつと耐えられない。だから、わからない。どんなに辛くても、一緒に生きられる方法を探したい」「そうか」

圧力が消えた。良かった。アルバートさんも納得できたんだよね。

「もう。アタシが殺されるかと思ったよ。怖いのは終わりにしてね」

「いや、まだゆっくりはできねえよ、アヤちゃん」

「俺からも話がある」

「祐介君もシユウ君も、顔が怖いよ」

「白虎国軍がここに攻めて来る可能性がある」

あ！ そうだよ。みんなで逃げたらダメかなあ。

「祐介、その対策はまだ打てるから後でもいい。シユウ、お前の話は何だ」

アルバートさんの顔は真剣なまま。いつもの茶化す感じはない。

「俺達が帰る方法です。俺は伝承を聞いた時から、邪神つてのは心の弱さのことを言っているんだと思ってました。それぞれが救世主として、同時に邪神として、お互いの弱さを克服する。邪な心を倒せば邪神はいなくなるんだから、他国と戦争をしなくても国は救われる。そう思ってたました」

「その言い方だと、違ったみたいだな」

アタシ、そんなの全然思いつかなかった。シユウ君ってやっぱりすごい。でも、アルバートさんの言う通りだよな？

「俺の主観では、確実に四人とも成長してます。それでも、帰れる兆しがない。何か別の方法があるなら、それを見つければならないんです」

「そういや、ここに来たのってハルちゃんが何かしたからだよね？ハルちゃんならわかるんだろ」

「私も、修一君の言った通りだと思ってた。それで帰れるはずなの。邪神が滅べばいいから、克服しなくても死ぬっていう方法があるんだけど……」

「そんなの、ダメだよ！ ちゃんとみんなで帰るんだから。ねえ、まだ邪神が残ってるんじゃないかな。みんなで考えてみようよ」

【H】 蒔き過ぎた種

どうしてだろう。本に書いてあった通りの方法で物語の世界に入れたんだから、書いてあった方法で出られるはずなのに。

「アルバートさんとデュークはアタシ達の弱さとか、よくわからないと思うけど、何か思いついたら言ってね」

「おう」

「はい」

「とりあえず、シユウが考えてたのを話してくれよ。それ以外で探さなきゃいけないんだろ」

「そうだな。祐介はいつも、何とかなるって言って流されるばかりだった。実際、それで何とかなってきた。だから、自分から何かをしようとはしなかったんだ。けど、春奈のことで動いたのは自分の意思だろう？ アルさんとも戦ったらしいな。流れに任せるだけじゃなく、自分で何とかしたいことがあって、その為に動いた。こんなところか」

「アタシは？」

「アヤは、難しいことがあると、誰かを頼ったり甘えたりする癖がある。何とかしてくれるヒトがない時は、それが運命だって諦めてた。でも、この世界へ来て、アヤなりに帰る方法を考えたんだろ？ 全ての国と和睦して、戦争を終わらせようって言い出したのがアヤだつて聞いた時は、本当に驚いたよ。会議の席にも同行するって自分から言ったんだつてな。大変でも逃げずに、どうすればいいのか考えて、それを実行したんだ。頑張ったな」

「何かシユウ君に褒められると、照れるね」

「シユウはどうなんだ？」

「俺は、自分以外の誰をも信用し切れなかった。共同で何かをするにしても、いつも最後には自分でやるつもりでいた。全く信用しない訳じゃない。ただ、何をするにしても、自分を最後の保険として

掛けていたんだ。頼んだヒトが逃げたらどうする、失敗したらどうする、結局最後に頼れるのは自分なんだってな。けど、俺は見つけたんだ。いや、違うな。前からわかっていた。ここへ来て、信じられたんだ。やっと、完全に」

私の……こと、だよな。ありがとう。

「そんなの誰でもそんな感じな気がするけどな。まあ、シユウがそれが弱さだと思ってたなら、それが邪神なんだろ。あとはハルちゃんか」

「春奈は……」

全部わかっているのは修一君だけだから、言わないでいてくれるんだね。

「どうしたんだ？ みんな何か成長したって言ってただろ？」

「私もね、修一君と同じだよ」

「二人とも深いよね。アタシは、そんなの弱さじゃないと思うんだけどな」

「なあ、ちょっといいか」

「アルバートさんも何か思いつきました？」

「いや、聞いている限り、全部正解なんじゃねえのか？ お前らみんな聞きながら頷いてたぜ。本人が納得するくらいなんだから、間違いないだろう」

「私も同感です。何か見落としがあるのかも知れませんが、あるとすれば、ハルではありませんか？ 他の三人と比べて、見えない部分が多いはずですよ」

「デュークの言うことも当たってるかも。アタシはほとんど誰かと一緒にだったし」

確かに、私の行動の大半は、ここにいるヒト達が知らないことがほとんど……。まさか……。

「一つだけ、あったかも知れない」

【Y】それはもう皆の闘い

みんな色々考えてんだな。これで、ハルちゃんの話が当たりじゃなかったら手詰まりか。

「白虎国王に、私を憎むように念術で……」

「ハル！？ 何でそんなことを」

「アヤ、問題はそこじゃない。そこに邪神が残ってるってことも知れない」

シユウはハルちゃんを庇ってるのか？ さつきもそうだったな。考えてみれば、邪神の話の時に、前からわかってたって言うってたな。もしかして、ハルちゃんを変えたのはシユウか？

「だとすれば、問題が一つになってわかり易くなった」

「アルバートさん？ もしかして、白虎国軍と戦うつもり？」

「そうしなければ帰れないんだろ？ 昨日見たのがそうなら、明日には攻めて来るぞ」

「私が余計なことをしたせいで……ごめん、みんな」

「ハル。自分の行いを悔いているのなら、ちゃんと立ち向かいなさい。貴方のしたことが間違いでも、貴方の為に戦うというヒトもいるんです。自分のせいで誰かが傷付くことになっても、逃げずに一緒に闘うべきです」

「うん。デュークの言う通りだよ。アタシは剣で戦えないけど、ハルの味方でいることはできる」

「俺も戦う。ちゃんと護るよ、春奈」

やっぱり、ハルちゃんの心を動かしたのはシユウみたいだな。よし。応援してやるよ。

「もちろん、俺も戦うぜ。アヤちゃんは俺が護ってやるからな」

「頼りにしてるよ。デュークも手伝ってくれろ？」

「はい。勝利できれば、戦争を終わらせられるかも知れません」

「アルさん。力を貸して下さい。お願いします」

「最初からそのつもりだよ。シユウ、本気見せるよ」

「ハル。あとは貴方の意思次第です」

「みんな、ありがとう。私、みんなと帰りたいたいよ」

本当に、変わったよな。感情を抑えてなきや、こんなにいい顔で
きるんじゃねえかよ。

「さて、それじゃ、具体的に作戦を立てるか」

「あれが白虎国軍じゃなかったらどうするの？」

「綾香ちゃん。空気を読めよ。あれは白虎国軍で、明日には攻めて
来るんだよ」

「連携の問題もある。アルさん、俺達は城の兵とは別働隊で編成し
ましょう」

「そうだな。六人は多い。三人ずつに分けるぞ」

「ねえ、アタシやハルも人数に入ってるよね？」

「下手に城内に残るより、一緒にいた方が安全だ。ちゃんと護るか
ら心配するな」

「まず、アヤちゃんとハルちゃんがそれぞれに入るだろ。俺はアヤ
ちゃんの方に入るよ」

「私はシユウ君と同じ方がいいです」

「じゃあ決まりだな。シユウとデュークでハルを、俺と祐介で綾香
ちゃんを護る」

「攻めるなら両翼からですね」

「そうだな。中央は矢が心配だ。安全の為に外側から行くぞ」

もう立派な騎士だな、シユウ。帰ったら、俺も何か努力してみる
かな。

【S】戦場

敵は五千つてところか。こつちも五千近いな。士気の勝負かも知れないな。

「デュークさん、援護頼むよ」

「お任せ下さい」

「春奈、鎧、重くないか？」

「思ったほどじゃないから、平気」

「よし、行くぞ！」

止まない怒号が轟いている。戦場の空気だ。躊躇うな。春奈とデュークさんを護るために、敵を倒すんだ。

「はあっ！」

続け様にすれ違った騎馬兵に斬撃を入れる。二人を斬り落とし、そのまま歩兵の小隊に突撃して行く。敵のすぐ手前で馬から飛び降り、空中から一人を右手の剣で貫きながら迫っている斬撃を左手の剣で払い除ける。馬に下敷きにされた兵に火矢が刺さる。それに気を取られた瞬間を逃がさず、一人を斬り伏せる。向こうの方に無数の点が見える。矢雨だ。春奈のそばに引き返し、近くに飛来した矢を斬り落とす。

「大丈夫か？」

「うん。戦争つて、こんなに怖いんだね。怪我しないで」

「必ず、俺かデュークさんの近くにいろよ！」

デュークさんに迫っていた敵の脚を薙ぐ。転倒する時に持っていた剣が刺さったのを確認して通り過ぎ、近くの騎馬兵を斬り上げる。左上半身を失った敵の脚を掴んで引きずり降ろし、馬を奪う。飛び乗るところへ斬撃が来た。

「しまっ」

矢が剣を弾き飛ばす。その勢いで仰け反った敵に斬撃を見舞う。

デュークさんの方に目を向けると、春奈に近付く騎馬兵を完璧に射

落としている。本当に頼りになるヒトだ。馬上で弓を扱っただけでも相当難しいのに、あの腕前は神業と言っても過言じゃない。周辺の敵はほぼ全滅させた。

「デュークさん！ 後ろだ！」

デュークさんの後方から騎馬兵が迫っている。弓を構えるのは間に合わない。俺もここからじゃ間に合わない。

「くそっ！」

馬を駆る。もう敵は剣を構えている。デュークさんには俺の声が届いていない。戦場に掻き消されてしまっている。

あれは

「春奈あつ！」

敵が剣を突き出すところへ、春奈が馬ごと突っ込んだ。春奈が吹っ飛ばされ地面を転がる。ようやく辿り着き、敵を鎧ごと叩き斬る。デュークさんはもう春奈の隣にいる。春奈の鎧の下に血溜まりができていく。また矢雨が飛んで来ている。こっちに向かって来ている部隊も見える。

「デュークさん！ 新手は必ず俺が防ぐ！ 春奈を頼む！」

デュークさんがこちらを向き、頷く。俺は馬を返した。

「うあああああつ！！ 邪魔を！ するなああああつ！！！」

【A】最強の名は天賦の才に経験を積んだ上

すごい。二人とも強いのは知ってるけど、敵がどんどん減っていく。何もできないでいるアタシのことも、ちゃんと護ってくれてる。

「アヤちゃん！ 俺とアルバートの間から、出るなよ！」

「うん！」

大声を出さないと聞こえない。これだけヒトがいると、味方を見分けるのも大変だよね。戦ってるヒトってやっぱりすごい。わっ！ 矢って剣で斬れるんだ。あんなに速く飛んでくるのに。

「もう少し右に寄れ！」

「はい！」

すごくよく通る声。アルバートさんは、さすが団長っていう感じ。アタシと祐介君の動きも全部見てて、アタシのところには敵が来ないようにしてくれてる。もう、周りの敵がほとんどいなくなった。

「祐介！ 何突っ立ってる！」

「アイツ！ 青龍国の兵じゃねえだろ？」

白虎国の兵士と戦ってるヒトを指してる。兜の後ろから伸びる金髪が目を引く。あのヒト、最初からずっと近くにいたような……？

「ずっと周りにいたな！ 単独で動いていたが、敵じゃない！」

「アヤちゃん任せていいか!？」

「さっさと行って来い！ 綾香ちゃんはもう少し俺の近くに来い！」

「はい！」

「悪いっ！ 任せる！」

祐介君が走って行く。何か気になるのかな？ 確かに何か危なっかしいような気がするけど、アルバートさんや祐介君を見慣れてるせいで、他のヒトがあまり強そうには見えないんだよね。

「騎馬兵が来るぞ！ 三騎いる！ 俺が仕損じたら、とにかく避けろ！ 馬に絶対当たるな！」

「はい！」

言われてみれば、確かにこっちに来る敵がいる。アタシ、普通に戦場に出たらすぐに死にそう。アルバートさんは倒した敵の剣を拾ってる。周りを見ながら、次のことも何か考えてるんだよね。これって、アタシがいるから護ってくれてるけど、一人だったらもつと強いんだよね？ どれだけ強いんだろう。まさか、一人で軍隊に勝つたりして。

「あの真ん中の馬をよく見てろよ！」

「はい！」

返事しかできない。余計なこと言って邪魔しちゃいけないもんね。ちゃんと聞いてるってことだけでも伝えたくて、精一杯の声を返す。真ん中の馬。真ん中の馬。え？ 左の馬が転んだ。上のヒトが転がっていく。剣が馬の脚に刺さってる。アルバートさんが投げたんだ。今度は右の馬に投げた。剣ってあんな風に真っ直ぐ投げられないよね？ どうやってるの？ あ、でもこっちは避けられた。馬を操るのもすごいなあ。敵がすごいのは困るけど。

「きゃあっ!？」

アルバートさんに押し倒された。アタシの上にあったアルバートさんはすぐに立ち上がる。

「馬を見てるって言っただろうが。気を抜いてると死ぬぞ」

「あ！ ごめんなさい！」

アタシ達を通り過ぎた敵が二人、近付いて来る。今度は突進じゃない。斜めに、両側から挟むように。馬ってこんなに怖かったっけ？ 脚に力が入らない。立てない。アルバートさんがアタシの前で剣を構えた。何か、少し楽になった気がする。アタシのところまで敵が来られないように、壁ができたみたい。左の馬が突然立ち上がった。その勢いで上のヒトが後ろに転げ落ちる。馬は向きを変えて逃げて行く。その間に、アルバートさんは右の敵の斬りかかって、もう、馬から落ちた敵にも剣を振り下ろしてる。あっという間に倒しちゃった。馬も怯えるってすご過ぎる。

「さっきは悪かったな。怪我はないか」

「うん、大丈夫。悪いのはアタシだよ。助けてくれて、ありがとう」

【H】望む時には届かないのに

修一君の声がした。怒鳴り声みたい。初めて聞いたな。

「うっ！」

「少し我慢して下さい」

このヒト……デュークさん？ 手が私のお腹にある。ああ、血が出ている。でも、そんなに痛くない。

「ありがとうございます。貴方に救われました。……無茶をしましたね」

「貴方に何かあったら、修一君が、悲しい気が、したの」

「無理して話さないで。時間はかかりますが、必ず助けます」
微笑んで。少し、安心する。

何か、時間がないような気がする。死ぬってことかな。変な感覚。

「ねえ、修一君の、こと、好き？」

「はい。好きです」

すっかりした笑顔ではつきりと答える。気持ちが伝わってくるみたい。私の気持ちじゃ勝てないかも。

「すごく、好き、なんだね」

「はい。シユウ君が貴方を想うのと同じです」

言葉に詰まる。私の動揺が顔に出た気がする。デュークさんは同じ笑顔のまま。その言葉を、どうしてその顔で言えるの？

「貴方とシユウ君の会話が聞こえてしまいました。でも、シユウ君のことが好きなのは変わりません」

嘘。隣の部屋に聞こえるはずがない。入り口にいてやっと聞こえるかどうか。もしかして、あの時、修一君と何か話したくて……。

「ねえ、私、死ぬ、よね」

「必ず、助けます」

「私が、いない、ところで、なら、キスくらい、までは、許して、あげる」

「今度、お願いしてみます。その時は席を外して下さい」

このヒトは、そういうことしないな。修一君の幸せを一番に願ってる。修一君と私のことを認めてくれているのがわかる。それでも、想い続けるって、すごいな。

「私、貴方に、だと、負け、そう」

「シユウ君は、私にも、貴方にも、同じように優しいです。同じように護ってくれます。でも、シユウ君が好きなのは、貴方です」
変わらない笑顔。

「もっと、早く、会って、友達、に、なりたか、たな」

「い」

何か言ってるけど、もう聞こえない。顔も段々見えなくなってきた。

修一君。

【Y】心残りは晴れて

あの金髪。変な剣捌き。そっくりだよ。

「らあっ！」

横から敵を斬り倒し、そいつに向き直る。

「おい、兜を取れ」

動く気配がない。置物の甲冑のように、こっちを向いた鎧が固まってる。

「あまり時間がないんだ。顔を見せてくれ、ルイ」

鎧越しでもわかるような動揺を見せ、ゆっくりと兜を脱ぐ　やっぱり！

「良かった！　無事だったんだな。安心したぜ」

「デュークさんと修一さんに救われました」

「あの二人は朱雀国から来たのに、何でお前もここにいるんだよ」

「私にはルイという」

「わかってるよ！　時間があまりないって言ってんだろ」

「会話に貴方の名前が出ていたので、ついて来ました」

「あいつらはそんなこと言ってなかったぜ」

「こっそりついて来ました」

何やってんだよ、コイツは。

「で、こんなところで何してんだよ」

「助太刀です。見ての通りでしょう」

相変わらずだな。くそつ。

「何で戦場にいるんだよ。大体、何で青龍国軍の鎧を着てんだよ」

「ですから、助太刀です。鎧は借りました」

多分、勝手に借りたんだろうな。

「大体わかったよ。安全なところに行ってる。あんな危なっかしい戦い方してたら死んじゃう」

「嫌です。昨日の話も聞いていました。私は自分にできることをし

たくて、ここにいます」

「したいって、何を？ お前はここで戦う理由がないだろ？」

「私は、貴方の力になりた……何を言わせるんですか！ とにかく、私は逃げません」

ああ、しまった。意識しちまう。全然気付かなかった。護ってやりたくなっちまったじゃねえか。

「わかったわかった。危ない時は俺が護れるように、もっと近くで戦ってくれ。無茶しないようにな」

「わ、私は護って欲しいなんて一言も……」

「俺が護りたいんだよ！ ごちゃごちゃ言っていないでついて来い」

「わ、わかりました。あの、あまり無茶をしないで下さいね」

くそつ、可愛いな。まずい。戦闘に集中できなくなりそうだ。早く戻ろう。

【S】弱さの果てに

もう周囲に敵はいない。さっきと同じ位置に正座しているデュークさんがいる。膝の上に春奈の頭がある。

「デュークさん。春奈は……」

「もう少し、時間を下さい。大丈夫です」

春奈は微動だにしない。呼吸している様子もない。デュークさんの隣に腰を下ろす。

「俺が、しっかり護っていれば……」

「私は、シユウ君に嘘はつきません。大丈夫です。少し、昔話をしてもいいですか？」

デュークさんは意味のないことはしない。春奈に目を向けたまま、黙って頷く。

「異国の騎士に恋をした女性がいたんです。出会いは偶然でしたが、二人は惹かれ合い、共に過ごした夜に、騎士が求婚しました。女性は幸せでしたが、その申し出を断りました」

春奈の腹部に置かれたデュークさんの手が、光っているように見える。

「理由を問う騎士に、女性は正直に話しました。別の国の近衛騎士の求婚を拒んだら、自分の家族が囚われてしまったこと、求婚を受けることが解放の条件だということを。それを聞いた騎士は女性の家族を取り戻す為、単身で城に乗り込みました。それに腹を立てた近衛騎士は人質を殺し、その後、乗り込んだ騎士との決闘で敗北し、死にました」

なぜ、デュークさんはこんな話を……

「その時、女性は婚儀の話し合いの為に城にいました。騒ぎを聞いて、自分が深く愛されていたことを知るとともに、自分の行為を悔やみました。そして、女性の深い愛と強い意志は、家族に再び命を与えたんです」

蘇ったということか。御伽話のようだが、わざわざ話すということとは実際の話なのか？

「春奈を蘇らせる、と言っているのか？ そんなこと不可能だろ」「私はできません。信じて、もう少し時間を下さい」

それを聞いて、デュークさんの方へ目をやる。それに気付いたデュークさんが、微笑んだまま、俺を見る。その表情は戦場のものじやない。可愛らしい女性の笑顔だ。

「もしかして、女性ってというのは、デュークさんのことか？」

「私の姉です。人質が、私です。蘇らせてくれた時に、記憶も受け取りました」

「……姉さんは、どうなった？」

「優しい騎士が、人質が死んだことを自分のせいだと責めないように、証拠を全て消しました」

「そういうことを言ってるんじゃない！ 亡くなったんじゃないのか」

「私の中に生きています」

「ってことは」

「シユウ君。シユウ君は、私かハルのどちらかを選んだりできません。どちらを選んでも後悔します。私は、そんなシユウ君が好きです」

声が出ない。デュークさんはずっと変わらない笑顔のまま、初めて見せる涙が頬を伝っている。

「できれば、私のことを忘れないで下さい。シユウ君の中に生きていられるなら、私は幸せです」

デュークさんの身体は光っていたんじゃない。薄く、透けるように、色を失っていく。

「そうだ。ハルのお許しをもらったので、一つだけ、お願いを聞いて下さい」

涙を流しながら、ずっと笑顔のまま、はっきりと言う。

「私のこと、デュークって呼んでみてもらえませんか」

もう、向こう側が透けている。手を伸ばしながら、精一杯、言葉を紡ぐ。

「……デューク」

「ありがとう、シユウ」

俺の手に触れるものはない。けど、その愛は、絶対に消えない。

【A】バイバイ

窓から夕日が差し込んでる。眩しくて、顔を背ける。

「アヤも無事だな。良かった」

シユウ君が向かいに座ってる。その肩にハルが寄りかかっている。

「あとはハルちゃんか」

祐介君が左側にいた。その向こうに本棚が並んでる。

「あ……戻って、来たんだね」

シユウ君と祐介君が頷く。

「二人が戻って来たのは、いつ？」

「ついさっき。シユウも俺とほとんど一緒だったよ」

「じゃあ、ハルももうすぐだよ」

アタシとシユウ君の間に、本が置いてある。何となく、手を伸ばす。

「アヤ、やめておけよ。多分、俺達がいたところだ」

「だろうな。物語は全部、俺達の中にあるんだし、今更覗くのも野暮だろ」

「そっか。ちょっとだけ、また行ってみたって思うんだけどね」

「まあ、アヤちゃんの気持ちもわかるけど、やっぱり、俺達はこっちの人間だしなあ」

祐介君の言う通り、か。会いたいヒトはいるけど、誰かが死んじやうのも怖いし。

「だけど、何も持って来れねえんだな。あんなに剣振り回してたのに筋肉ついてないし、結構シャレたネックレスも手に入れたのに」

「そういえば、行った時は制服だったよね？ 帰って来る前は制服じゃなかったけど、今は制服着てるし。夢みたいなものかな」

「記憶が一番の土産じゃないかな。経験や思い出は持って来られたんだからさ」

「シユウは おっ、ハルちゃんお目覚めか」

本当だ。ハルが起き……わっ！

「おいおい。そういうことは二人の時にやれよ」

シュウ君に抱きついてたハルが慌てて離れた。この二人、もしかして。

「シュウはいいもん持って帰って来たみたいで、羨ましいねえ。な、アヤちゃん」

「ふうーん。ほあーう。二人はそういうご関係ですかあ」

シュウ君とハルは照れくさそうに俯いてる。可愛いなあ。

「俺達もそういうご関係になるっか、アヤちゃん」

「んーあと五年くらいしたら考えてもいいかなあ」

きつと、アルバートさんみたいな頼れるヒトになるよね。今でも、祐介君好きだけど。

「長いつて。運命のヒトってのは直感が大事なんだぜ」

「ふふ。どうしよっかなあ」

「ねえ、みんな」

ハルの声に、振り向く。

「その……ごめ」

「なしなし！ 色々あったけど、そういうの背負って生きられるくらい強くなっただんじゃねえかな。みんな無事で戻って来たんだしさ、帰ろうぜ」

祐介君のこういうところ、いいな。ハルの為に。ありがと。

「アタシも帰ろつと。祐介君、一緒に帰ろっか」

「お。運命に気付いたか」

「うん。アイス食べたいの。おごってね」

シュウ君がいるから、大丈夫だよ、ハル？

「そういうことかよ。んじゃ、俺達は先帰るわ」

シュウ君とハルが手を振ってる。笑顔も同じだよ。退屈な人生じゃなくなるね。

「また明日ね。バイバイ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1612t/>

弱さの果て

2011年5月22日21時52分発行